

備前邑久窯跡群出土須恵器の器種構成に関する覚書

亀田 修一

— 論文要旨 —

備前邑久窯跡群は岡山県南東部に位置する須恵器窯跡群である。約130基の窯跡が確認されているが、発掘調査された窯跡は12基しかない。そのため生産された須恵器の器種構成に関する研究は十分なされていない。ただ、近年少ないながらも発掘調査が進み、その実体の一部が徐々に明らかになり始めた。

小稿は不十分ながら発掘調査された窯跡資料を中心に、未発掘ながら多少概要を知りうる窯跡採集資料を含めて、6世紀から11世紀頃までの備前邑久窯跡群で生産された須恵器の器種構成を整理したものである。

7世紀中葉頃からの飛鳥地域・難波地域への須恵器供給も含めた器種構成の変化は、備前邑久窯跡群での須恵器生産が都との関わりのなかでより動き始めたことを示しているといえよう。杯Hの蓋と身の逆転と蓋が身になり、8世紀後半まで残ること、杯Bの蓋にかえりを持つものがあまりみられないこと、家形陶棺の生産、特徴的な鴟尾の生産などはこの地域の個性であろう。

都への供給を意識しているといわれる7世紀後半～8世紀初めの寒風窯跡群における須恵器生産は、備前邑久窯跡群の須恵器生産の展開に重要な意味を持っていると考えられている。ただ、その後8世紀前半の窯はやや内陸の庄田地域などに入り、8世紀後半には備前市佐山地域にその生産の中心を移していくようである。8世紀代の備前邑久窯跡群における須恵器生産は中央と結びつきながらもこの地域の個性を残しながら展開したようである。

そして、9世紀以降はよくわからない点も多いが、8世紀代とは異なる展開をし、10世紀には中世備前焼への大きな転換が佐山東山奥窯跡などで始まったようである。

キーワード：備前，邑久窯跡群，須恵器，窯跡，宮都への供給，器種構成

1. はじめに

備前邑久窯跡群は岡山県南東部に位置する須恵器窯跡群である。約130基の窯跡が確認されているが、発掘調査された窯跡は12基しかない。そのため須恵器研究は基本的に採集資料によってなされてきた⁽¹⁾。

ただ、近年少ないながらも発掘調査が進み、その実体の一部が徐々に明らかになり始めた。

小稿は、いまだ不十分ながらもこれらの発掘調査の成果をもとに備前邑久窯跡群出土須恵器の器種構成の変遷について簡単な整理を行うものである。対象資料は、上

記のように発掘調査資料を基本的に扱うが、一部採集資料も補助的に扱うこととする。今回取り扱わない窯跡採集資料を扱うことで、多少違った様相も見える可能性もあるが、今回はより確実な発掘調査で出土した窯跡資料を中心に検討したい。

備前邑久窯跡群に関する研究は註1にあげたものが代表的であるが、器種構成の変遷に関するものは基本的にみられない。小稿は諸先学の研究成果を踏まえつつ、筆者らが近年発掘調査した佐山新池1号窯跡、佐山東山窯跡群、庄田工田窯跡（亀田ほか2014～2020）などの成果をあわせ、整理するものである。

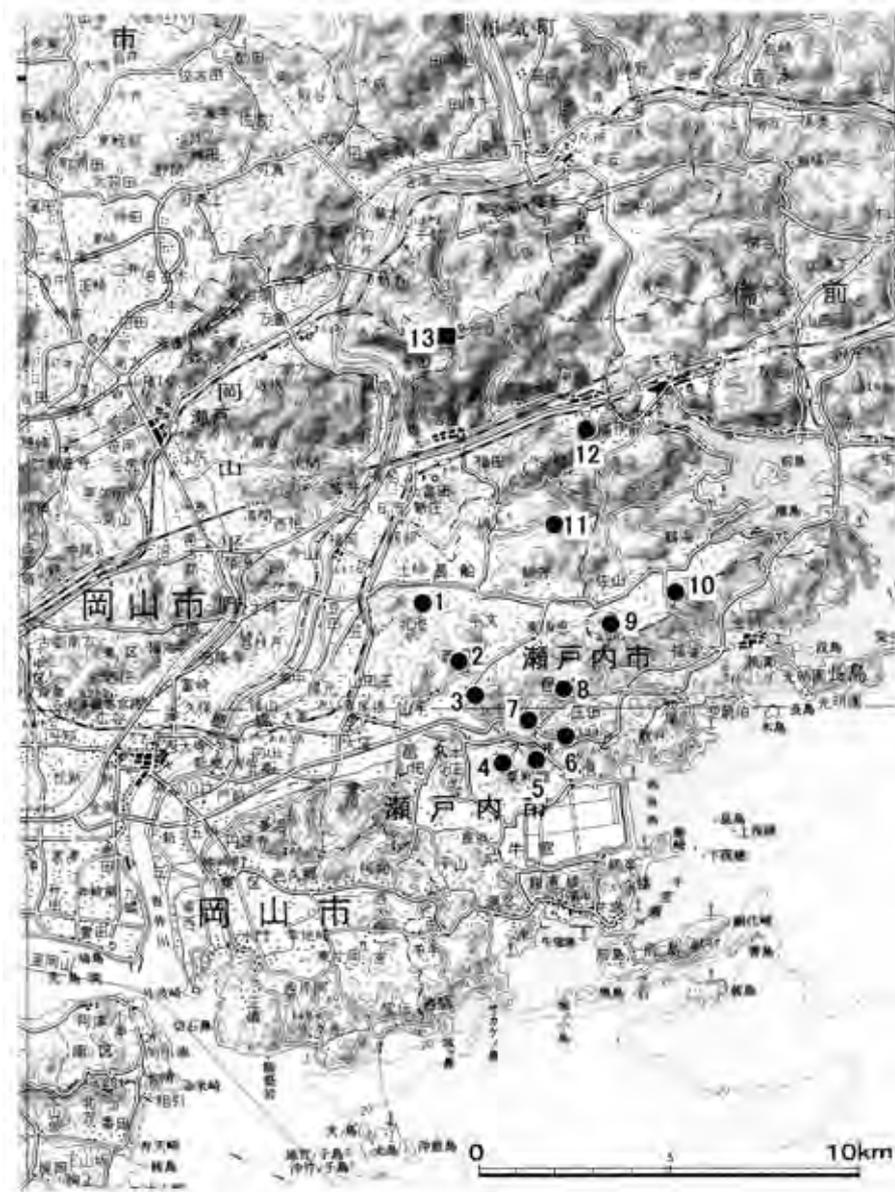


図1 関連遺跡位置図 (1/200,000)

- 1 木鍋山窯跡 2 比丘尼岩下窯跡 3 青木1号窯跡 4 寒風窯跡群 5 土橋窯跡
- 6 奥更谷窯跡 7 新林(宮嶮)窯跡 8 庄田工田窯跡 9 佐山新池1号窯跡
- 10 佐山東山窯跡群 11 油杉窯跡群 12 東6号窯跡 13 熊山遺跡

2. 資料

(1) 木鍋山窯跡 (図2①)

瀬戸内市長船町土師に位置し、1979～1981年に断続的に町営グラウンド建設に伴って発掘調査された。全長8.2m、最大幅1.9mの半地下式登窯である(江見1998)。

6世紀中葉前後のもので、備前邑久窯跡群では最古の窯と考えられている。正式報告書は刊行されておらず、杯類、一段透かし孔高杯、壺甕類が報告されている。横瓶の可能性のあるものもあるようである。

(2) 青木1号窯跡 (図2②)

瀬戸内市長船町西須恵に位置する。1980年、個人宅新築時に黒色土中で遺物が出土したとのことである(池田1998a)。

須恵器は、蓋杯、高杯、壺甕類がある。杯身の口縁部の直径は11.6～13.0cmの大きさで、蓋・身ともにヘラ削りされていることから6世紀後半のものと推測される。高杯は有蓋のものが確認されており、脚部は長脚二段透かしである。その他、壺(14)は甕の可能性もある。

(3) 比丘尼岩下窯跡 (図2④)

瀬戸内市長船町西須恵、桂山の南東部に位置する(池田1998c)。林道が大きくカーブするところで黒色土が確認され、そのなかに須恵器が混じっていた。発掘調査は行われていない。

須恵器は、蓋杯、高杯、平瓶、台付壺、装飾須恵器の小壺、甕などが採集されている。図示された杯身の口縁部の直径は10.0～11.0cmの大きさで、底部はヘラ切りママである。ほかに13cm前後、12cm前後のものもあり、13cm前後のものはヘラ切りママであるが、12cm前後のものにはヘラ削りされたものもあるようである。高杯は短脚のものとやや長めのものがある。これらの口径とヘラ削りの有無から、6世紀末頃から7世紀前半のものと推測される。

装飾須恵器の小壺は、邑久郡地域で出土している装飾須恵器(牛窓町史編纂委員会1997、長船町史編纂委員会1998など)が備前邑久窯跡群で生産された可能性を教えるもので、重要である。窯跡出土例としては、この比丘尼岩下窯跡例が現時点では唯一のようである。

(4) 寒風窯跡群 (図2③, 図4①, ③～⑤, 図5, 図6①)

瀬戸内市牛窓町長浜に位置する。古く1929年に時實黙水が本窯跡群の北西部に位置する1号窯跡の灰原を発掘調査した。1978年、「寒風陶芸の里」構想に関連して、寒風古窯址群緊急調査委員会が磁気探査し、一部発掘調査を行った(山磨1978)。そして2005～2008年に牛窓町教育委員会が史跡整備に伴って発掘調査した(馬場ほか2009)。

これらの調査によって、7世紀初め頃から8世紀初め頃の窯跡が合計5基あることが確認された。それぞれの窯跡の時期は1-Ⅲ号窯跡：7世紀初め～前半、1-Ⅱ号窯跡：7世紀前半～中葉、2号窯跡：7世紀中葉～8世紀初め、1-I号窯跡：7世紀末～8世紀初め、3号窯跡：7世紀末～8世紀初めと考えられている。以下、馬場ほか2009の報告書の成果によりながら説明する。

1-Ⅲ号窯跡 (図2③) 寒風窯跡群では最初の窯と考えられている。地下式登窯で、7世紀初めから前半の操業と考えられている。古墳時代以来の杯身の口径が10.8～12.6cmの杯類(杯H)、高杯、台付椀、壺甕類が出土している。このほか確実にこの窯の製品かどうかはわからないが、上層土坑1で完形品の甕とともに陶棺片が出土している。

1-Ⅱ号窯跡 (図4①) 1-Ⅲ号窯跡の北側約5mの場所に並んで位置する地下式登窯である。1-Ⅲ号窯跡に次いで、7世紀前半～中葉頃に造営・操業されたと考えられている。古墳時代以来の杯身の口径が8.9～9.9cmの杯類(杯H)、これらより小型でつまみ付・かえりありの蓋と平底身の杯類(杯G)、中脚高杯⁽²⁾、短頸壺の蓋のほか、波状文を施した甕の小破片が出土している。またこの窯の製品かはわからないが、上層から中空円面硯の鳥形把手、鴟尾片と陶棺片が出土している。

1-I号窯跡 (図4⑤) 1-Ⅱ号窯跡の北側約6mの場所に並んで位置する地下式登窯である。7世紀末～8世紀初めの口径約15cmのつまみ付・折り曲げ口縁の杯蓋、やや踏ん張り気味の高台付の杯(杯B)、高杯、壺甕類と円面硯、鴟尾片が焼成部で出土し、焚き口部で鴟尾片と家形陶棺の屋根部破片が出土している。陶棺の復元幅は約72cmである。また灰原で「大皮」ヘラ書き杯蓋・杯身(図5-52・53)、「上」(図5-54)、「下」ヘラ書き甕などが出土している。

2号窯跡 (図4③④, 図6①) 1号窯跡(I・Ⅱ・Ⅲ)の南東約80m離れて単独で確認されている。全長12.7m、最大幅2.05mの地下式登窯である。

報告書に図示された須恵器は、7世紀中葉～8世紀初めの杯Gの蓋、杯Hの蓋と身が上下逆転し、本来蓋であったものが身として使用されたもの、杯Bの蓋、短脚高杯が窯体内・前庭部からまとまって出土している。杯Bの高台付身は出土していない。そのほか甕類が出土している。

灰原でもこの器種構成は基本的に変わらず、上記の器種のほかに小型直口壺(短頸壺)、円面硯、甕の口縁部と推測されるものが出土している。この時期まで甕が残るようである。ただ、窯体内と同じく、杯Bの身である高台付の杯身はなぜか出土していない。この窯では生産しなかったのであろうか。上層のゴミ穴からであるが、面取した長さ5cmほどの四角柱状製品が出土しており、

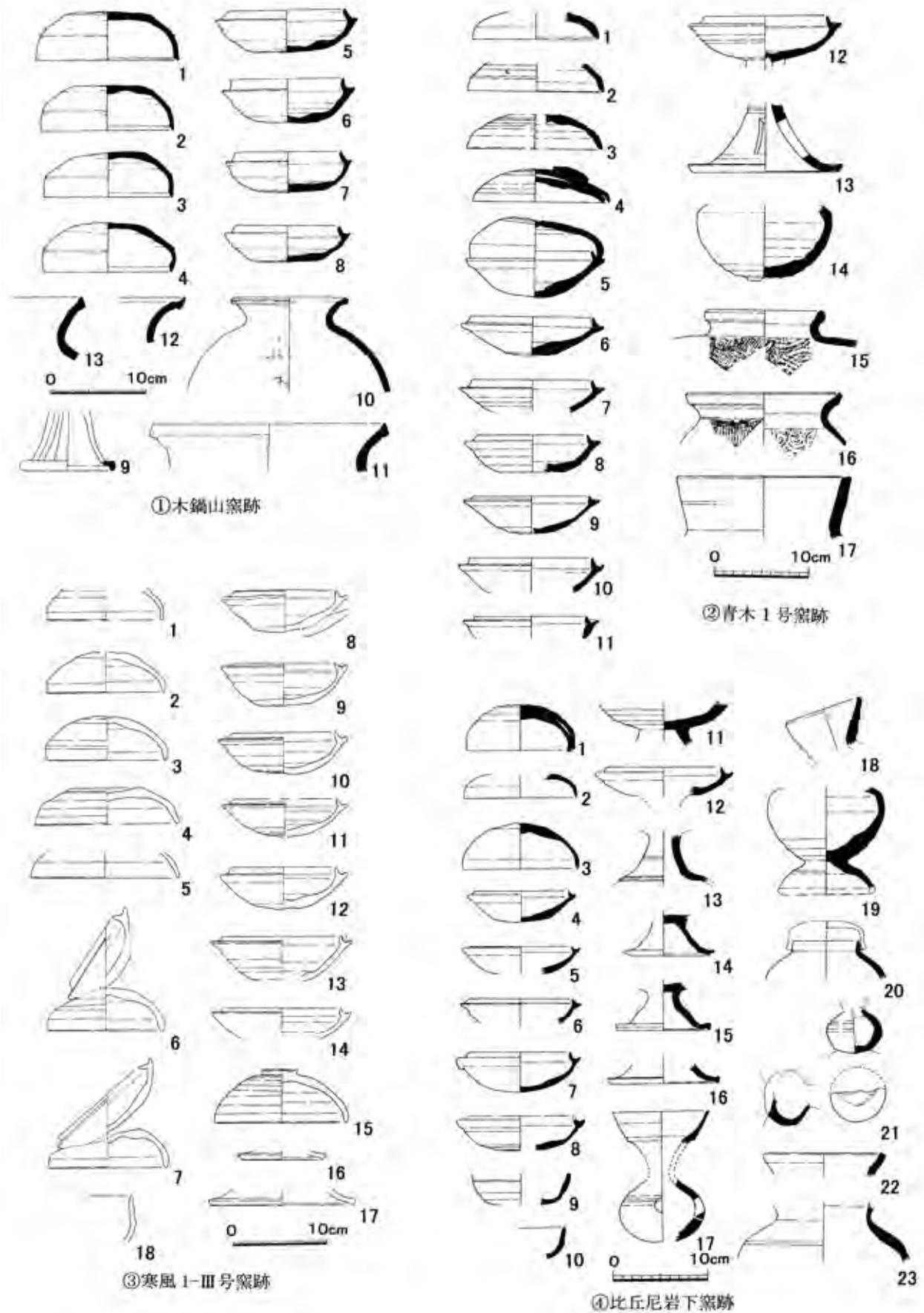


図2 木鍋山窯跡・青木1号窯跡・寒風1-Ⅲ号窯跡・比丘尼岩下窯跡の須恵器 (1/6)

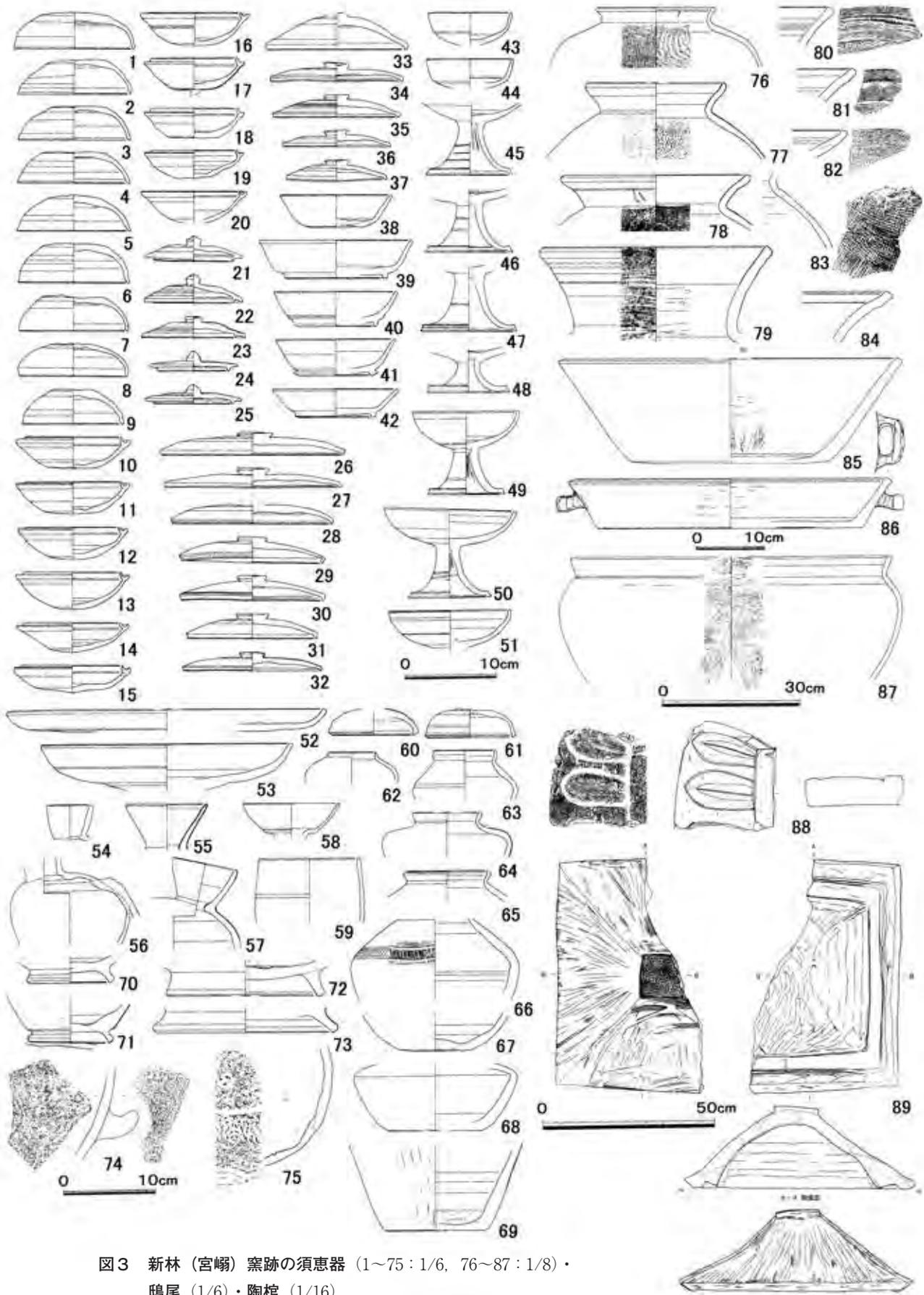


図3 新林（宮嶮）窯跡の須恵器（1～75：1/6，76～87：1/8）・
 鷗尾（1/6）・陶棺（1/16）

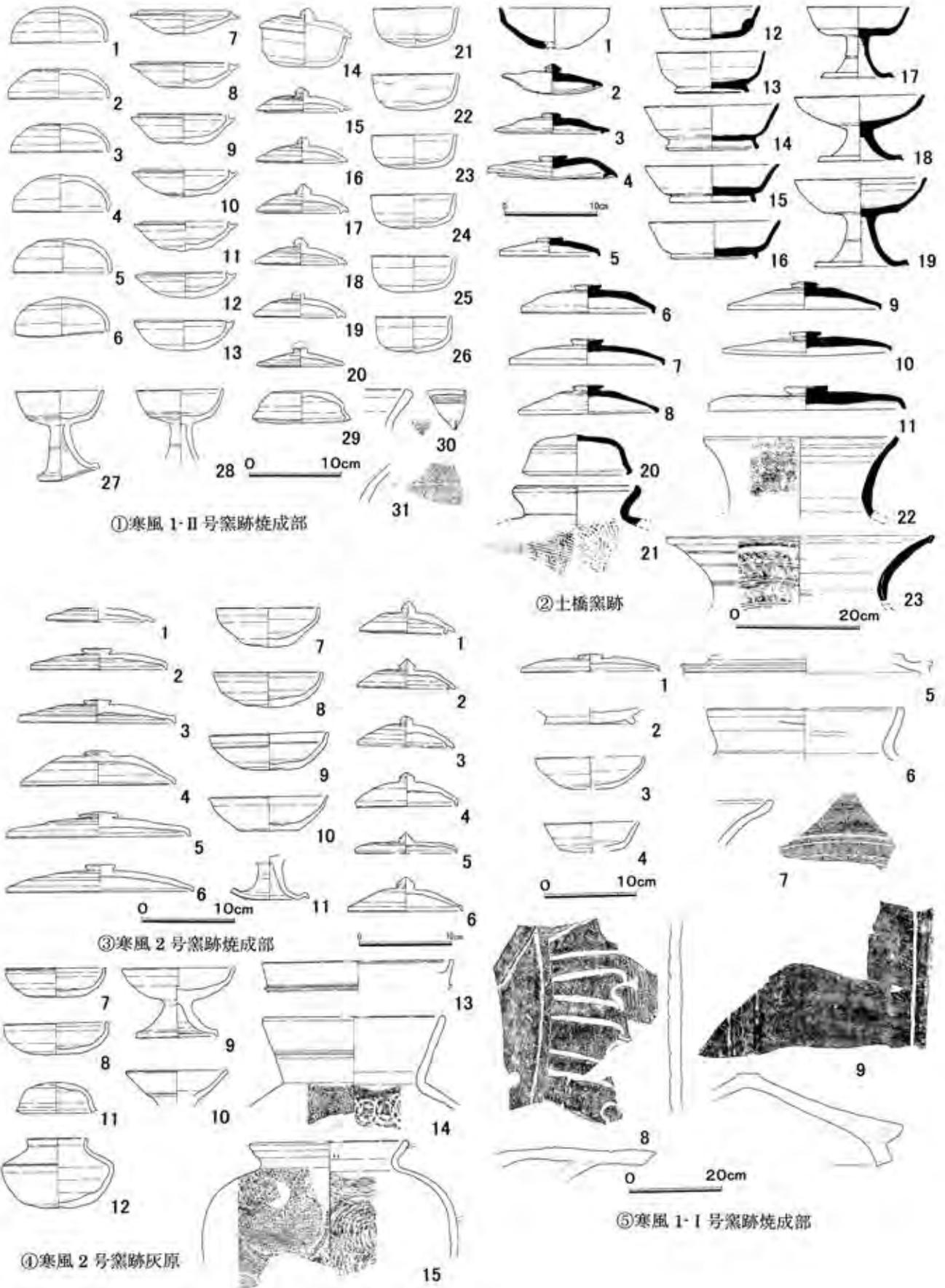


図4 寒風窯跡群・土橋窯跡の須恵器 (1/6)

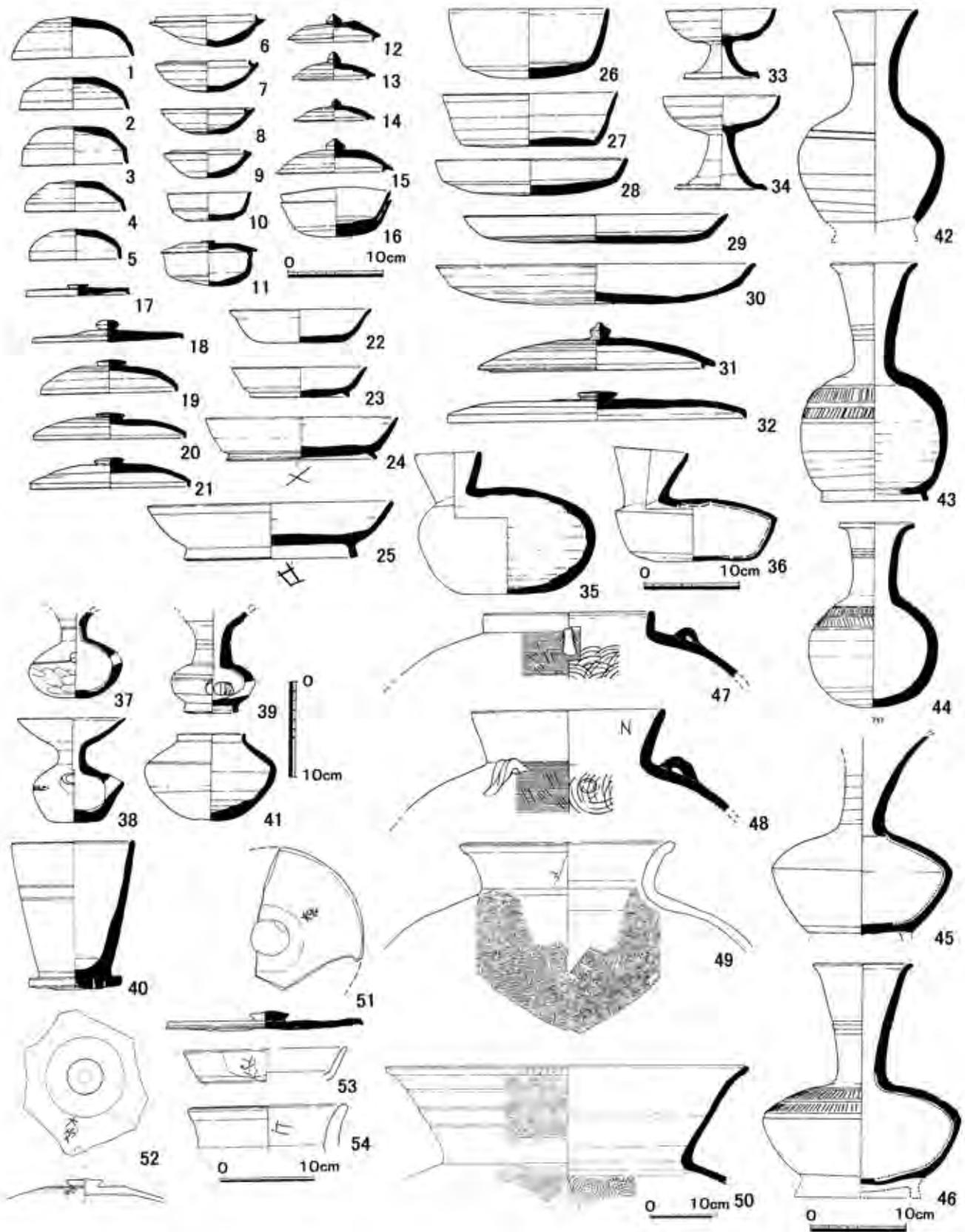


図5 寒風1号窯跡の須恵器 (1/6)

陶馬の可能性が推測されている。

また、以前出土したもののなか(図6①)には、上記の器種のほかに、皿・盤、脚台付鉢、鉢、平瓶(丸型・角型)、こね鉢などがある。

3号窯跡 2号窯跡の南東約60m離れて道路際に単独で確認された最大幅1.47mの地下式登窯である。報告書に図示されたものは、杯Bの蓋と身、甕の胴部破片である。蓋は基本的に口縁端部を折り曲げたものであるが、1点かえりを有するものがある。7世紀末～8世紀初め頃と考えられている。点数が少なく、図示していない。

(5) 新林(宮嶮) 窯跡(図3)

瀬戸内市邑久町尻海に位置し、1973年に東備西播有料道路(岡山ブルーライン)建設に伴って発掘調査された(伊藤1974, 亀田2006b)。推定全長約12m, 最大幅2.20mの地下式登窯である。

床面は少なくとも2面あり、7世紀前半～中葉のものと、7世紀末～8世紀前半の須恵器が出土している。須恵器の器種は古墳時代以来の杯身の口径が9.2～11.1cmの杯類(杯H)、つまみ・かえりを有する小型の杯蓋(杯G)、無高台の杯A、そして7世紀末～8世紀初め頃の杯類(杯B)、中脚～短脚の高杯、甕、平瓶(丸型)、皿・盤、把手付鉢、脚台付鉢、大型把手付平鉢、蓋付短頸壺、長頸壺(?), 大小の壺甕類などが出土している。甕の口縁部には、櫛描き波状文を施したものがみられる(80～82, 亀田2006b)。

以上のほか、推定幅約70cmの寄棟(四注)式家形陶棺(89)、鳥の羽根を表現した鴟尾(88)が出土している。鴟尾は類似したものが大阪市細工谷遺跡(岡村ほか1999)で出土しており、胎土分析の結果からはこの窯とまでは断定できないが、備前邑久窯跡群から運ばれたと考えても問題ないことが指摘されている(白石2001)。

(6) 奥更谷窯跡(図6②)

瀬戸内市邑久町尻海、新林(宮嶮)窯跡の東南東約1kmに位置し、1974年に東備西播有料道路(岡山ブルーライン)建設に伴って発掘調査された(葛原1975, 中野2006a)。

後世の削平が激しく、全長は不明、最大幅約1.3mの登窯である。2回以上の補修が認められている。

灰原に残っていなかったようで、窯体部のみ調査で、出土遺物は少なかった。8世紀前半のものと推測される。図化できたものは杯Bがほとんどで、ほかに壺類、甕類が出土しているが、図化された壺甕類には口縁部がわかるものはない。

(7) 庄田工田窯跡(図7)

瀬戸内市邑久町庄田に位置する。2018～2019年に日本学術振興会科学研究費補助金で、岡山理科大学考古学研究室が発掘調査した(亀田ほか2019・2020)。現時点では、窯本体は確認できておらず、灰原から須恵器が出土

している。8世紀前半のものと考えている。

器種は、杯Hの蓋と身が上下逆転し、本来蓋であったものが身として使用されたもの、杯Bの蓋と身、短脚高杯、脚台付の皿・盤、平瓶(角型)、横瓶、大型平底鉢、多孔甕、硯(蹄脚硯・円面硯)、蓋付短頸壺、葉壺形壺、長頸壺、壺甕類が出土している。頸部に櫛描き波状文を施した甕片が1点のみ出土している。また、頸部内面に「上」をヘラ書きした甕も出土している。このほか陶棺も採集されているとのことであるが、未確認である(亀田2006c)。

(8) 佐山新池1号窯跡(図8・9)

備前市佐山に位置する。2010～2012年、日本学術振興会科学研究費補助金で、岡山理科大学考古学研究室が発掘調査した(亀田ほか2014)。この1号窯跡のほかにも窯跡が存在する可能性はあるが、確認できていない。

8世紀後半を中心とする時期の窯跡である。少なくとも1回の造り直しが確認できている。最大幅2.6mの半地下式登窯(長さ未確認)である。

須恵器は、杯類(杯B, 杯A, 杯Hの蓋が身になったもの、金属器模倣杯)、皿・盤、高杯、平瓶、鉢、こね鉢、大型平底鉢、多孔甕、短頸壺、葉壺形壺、長頸壺、壺甕類など多様な器種が出土している。このほか手づくねミニチュア土器、瓦塔(小型陶棺?), 一枚作り平瓦なども出土している。甕には「大」をヘラ書きしたものが1点(図9-33)出土している。

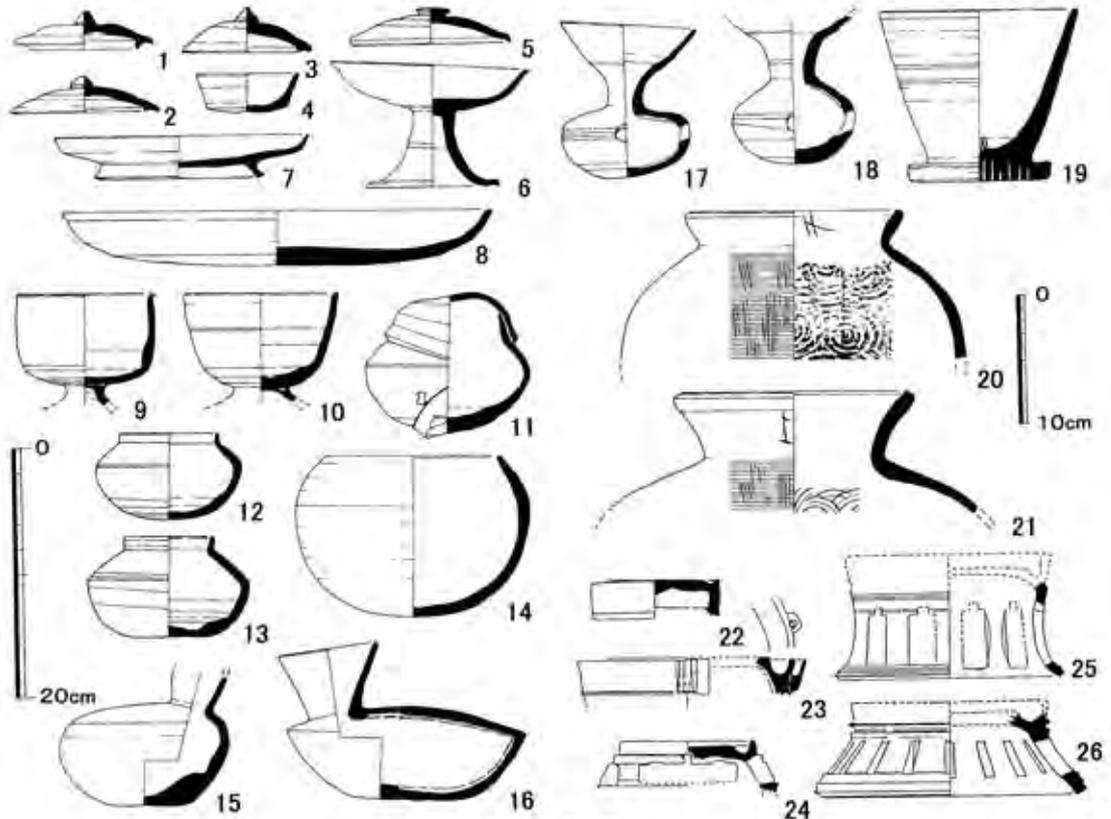
甕は大量に出土しているが、頸部に櫛描き波状文などの文様を施すものは確認できていない。口径は20cm前後、30cm前後、40cm前後、50cm前後のものはあるが、大きくは20～30cmの小型と50cm前後の大型の2グループに分けることができそうである。

(9) 佐山東山窯跡群

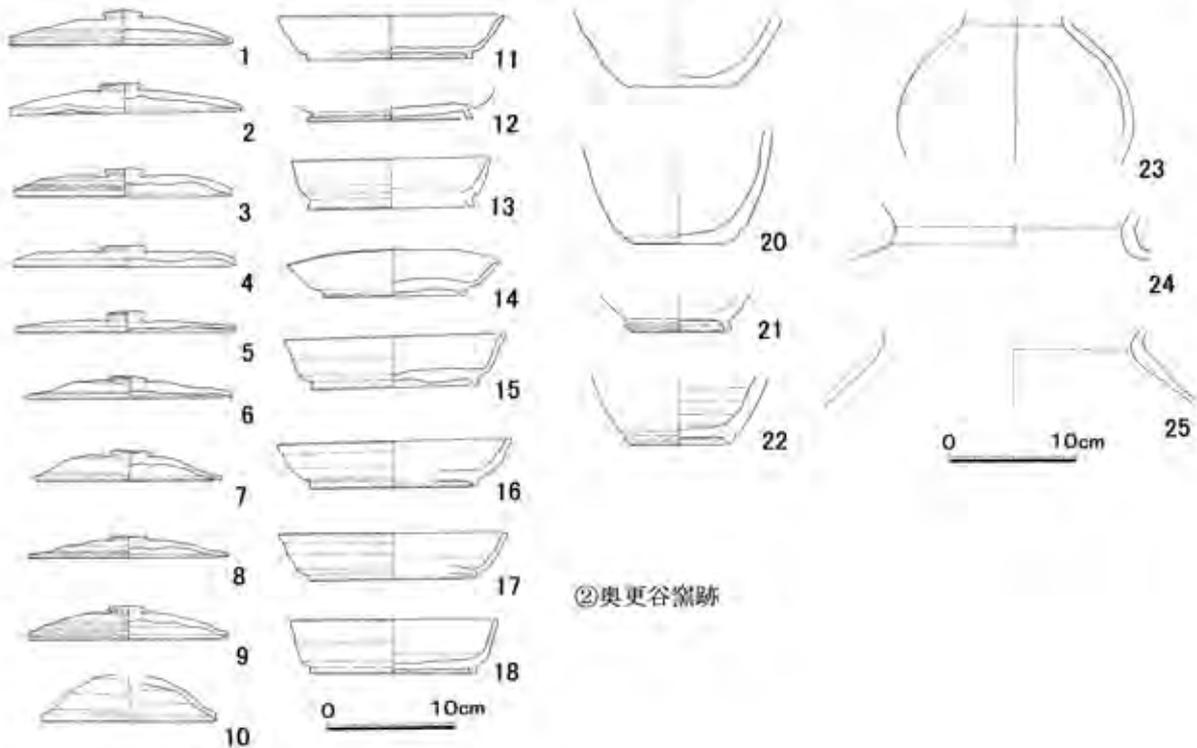
備前市佐山に位置する。前述の佐山新池1号窯跡が佐山盆地の西端に位置するのに対して、この佐山東山窯跡群は東端に位置する。約1.6km離れている。佐山新池1号窯跡の発掘調査終了後、日本学術振興会科学研究費補助金、(公財)ウエスコ学術振興財団学術研究費補助事業、岡山理科大学プロジェクト研究推進事業などの補助を得て、岡山理科大学考古学研究室が発掘調査した(亀田ほか2014～2018)。

窯跡は2基確認し、山裾側にある佐山東山窯跡が8世紀中葉～後半を中心とする時期のもので、斜面をやや上に上ったところにある佐山東山奥窯跡は10世紀頃のものと考えている。

佐山東山窯跡(図10～12) 全長は斜距離で17.21m, 水平距離で16.02mあり、奈良時代の須恵器窯としては現時点で日本列島最大の規模のようである。窯上部で少なくとも2回の造り直しが確認できている。最大幅は約2.6mである。



①寒風2号窯跡



②奥更谷窯跡

図6 寒風2号窯跡・奥更谷窯跡の須恵器 (1/6)

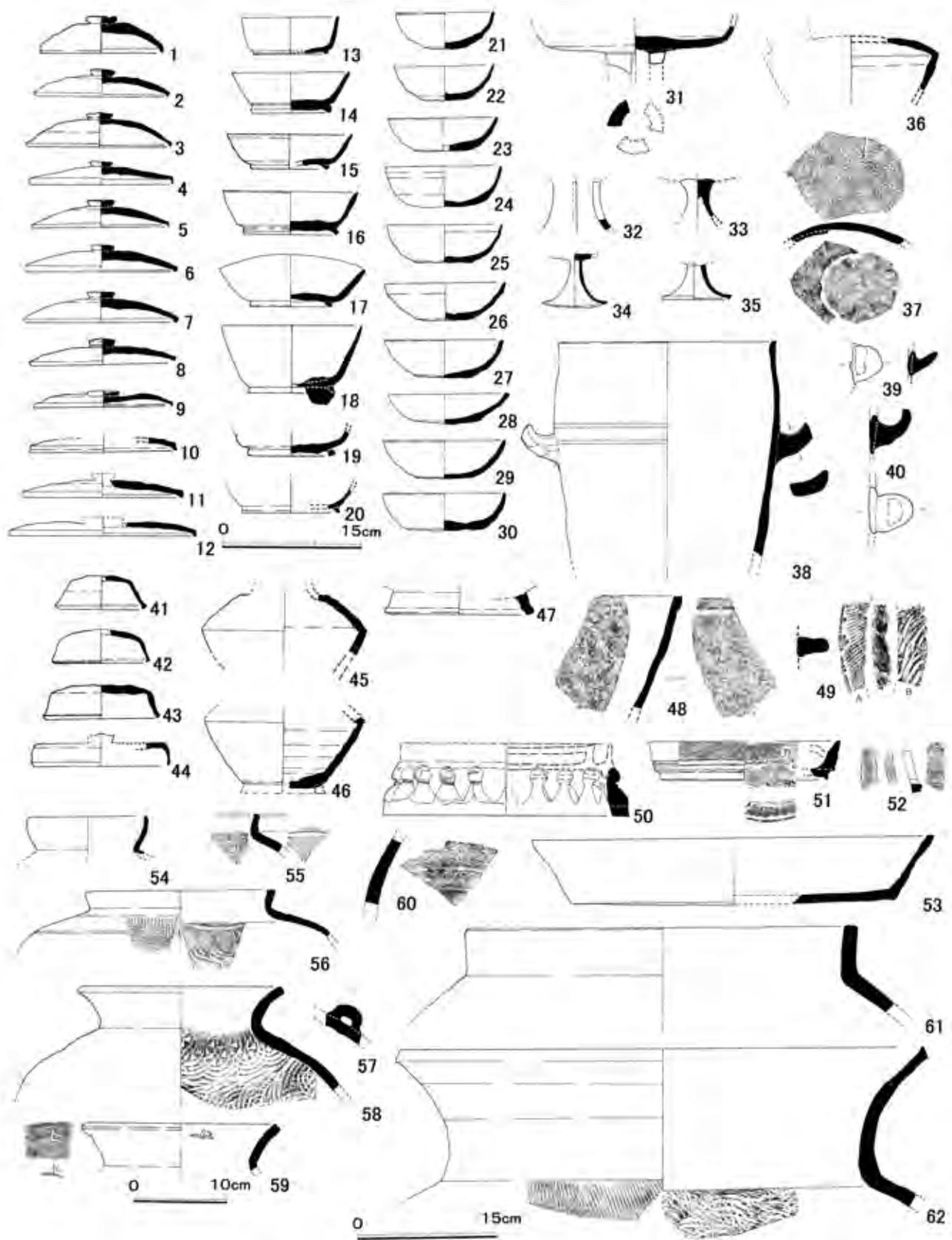


図7 庄田工田窯跡の須恵器 (1/6)

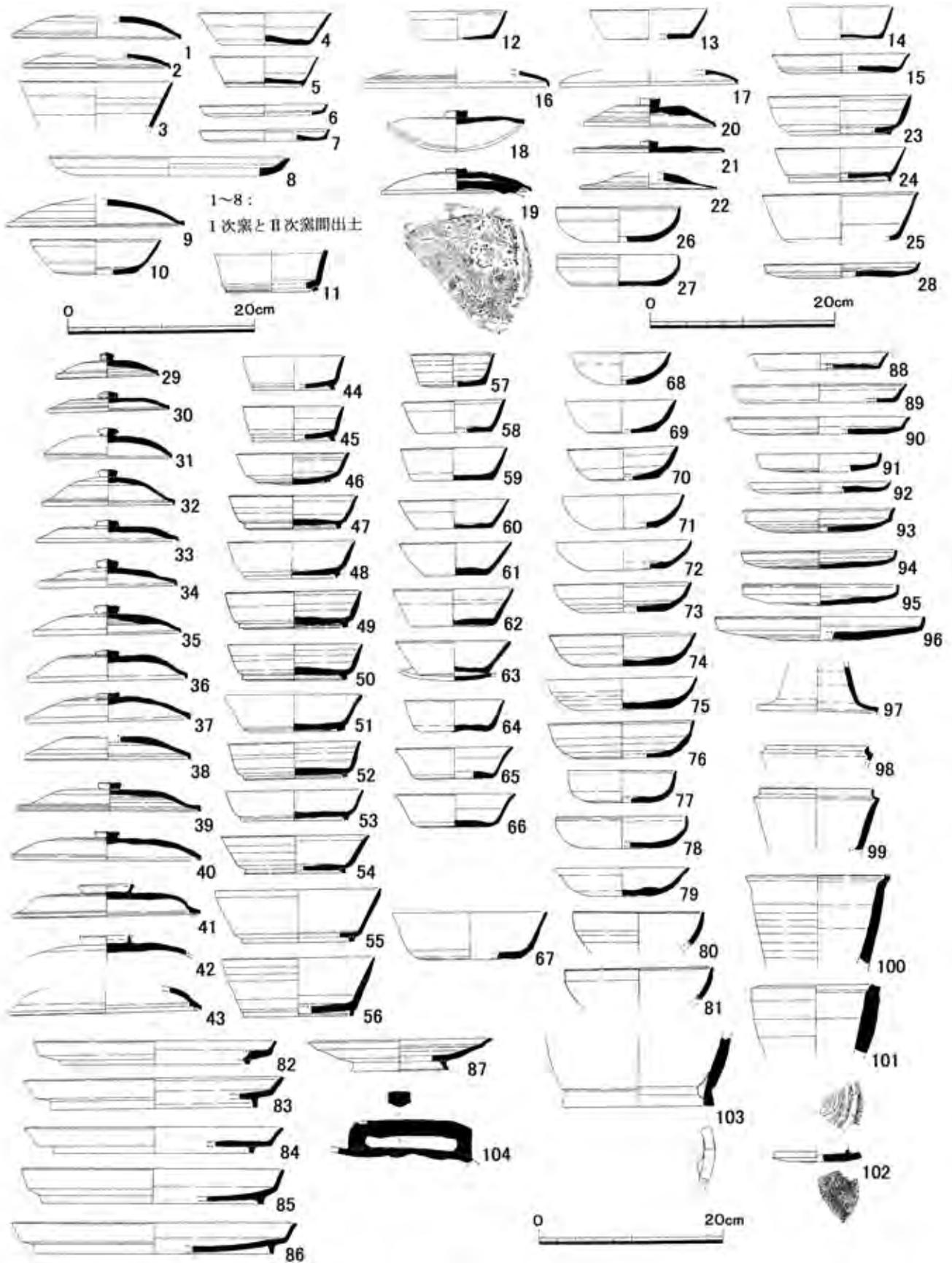


図8 佐山新池1号窯跡の須恵器 (1/6)

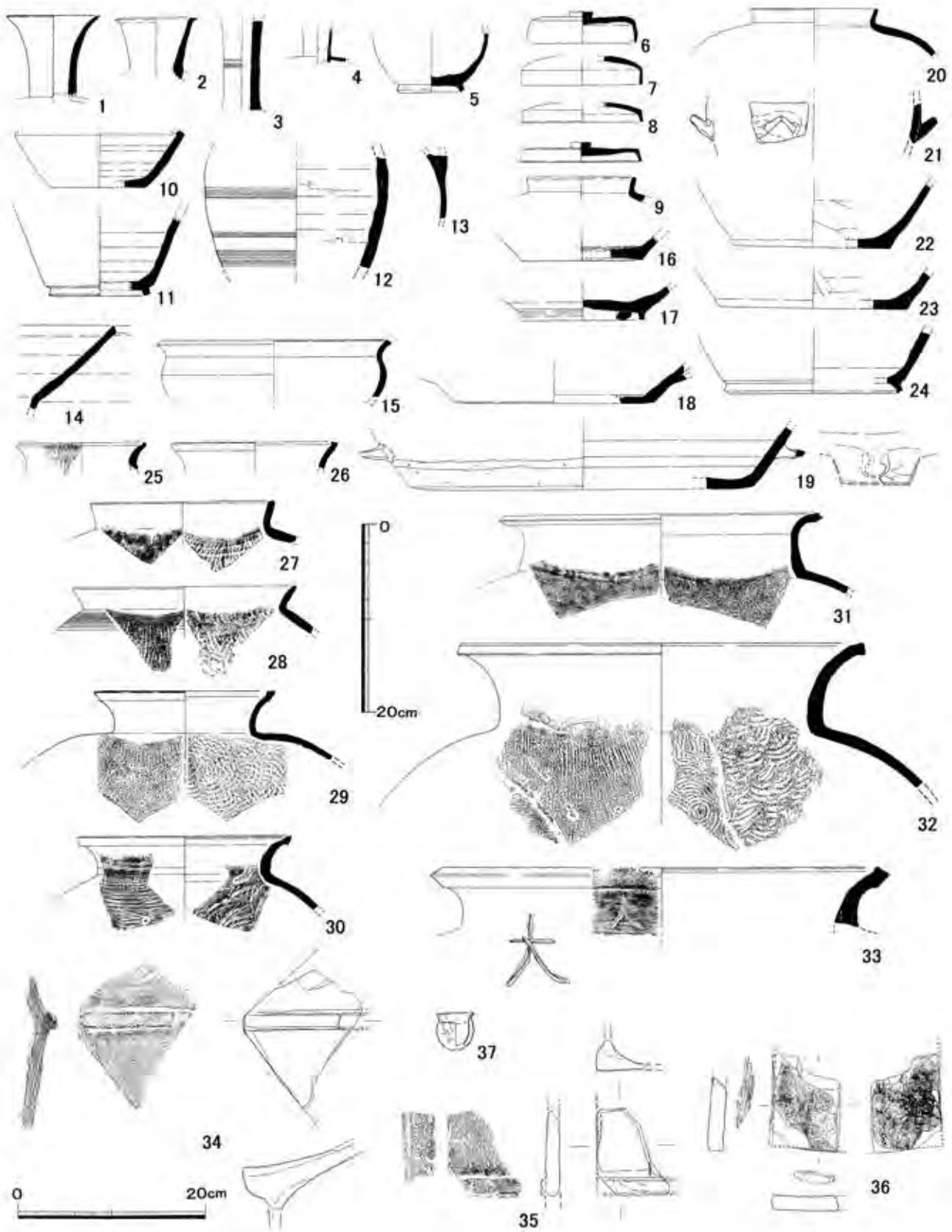


図9 佐山新池1号案跡の須恵器・陶棺・瓦・土師器 (1/6)

遺物は、杯類（杯B、杯A、杯Hの蓋が身になったもの、金属器模倣杯）、皿・盤、高杯、平瓶、鉢、こね鉢、鉄鉢形鉢、多孔甗、短頸壺、薬壺形壺、長頸壺、壺甗類、風字硯など多様な器種の須恵器が出土している。このほか土師器を須恵器窯で焼いたと推測される多孔甗（図11-2）・甗（図11-33・34）・移動式カマド（図10-88）なども出土している（亀田2017）。さらに、10世紀頃の須恵器碗・小皿などが少量出土しており、最後の造り直しの窯で焼かれた可能性も考えられる。

また、「福」押印須恵器碗、「葛原小玉女」ヘラ書き須恵器壺、「□□十六年」ヘラ書き銘文磚など貴重な文字資料が出土している。

甗類の頸部に櫛描き波状文などの文様はみられない。

甗は、口径が20～30cmの小型、30～40cmの中型、そして50cmを越える大型の3グループに分けることができそうである。

佐山東山奥窯跡（図13②） 佐山東山窯跡の東奥100mほど上ったところに位置している。半地下式登窯で、斜距離で5.05m、水平距離で4.50m、最大幅1.78mある。10世紀の須恵器窯である。碗を焼成した須恵器窯としては、備前邑久窯跡群では現時点で最古のもので、備前焼のルーツとなる可能性があると考えている。

遺物は、平底杯、輪高台杯、輪高台碗、平高台碗、小皿、鉢、耳付壺、甗、風字硯などが出土している。底部切り離し技法にはヘラ切りと回転糸切りの両者がみられる。このほか糸切り碗をのせた焼台、土師器を須恵器窯で焼いたと推測される甗（44）も出土している。

甗類は、あまり焼成されていなかったようで、点数はさほど多くない。頸部に櫛描き波状文などの文様はみられない。口径15～25cmの小型、40cm前後の中型の2グループに分けることができそうである。

(10) 東6号窯跡（図13①）

備前市伊部、備前焼で有名な伊部南大窯の南東側に位置し、2001～2002年に発掘調査された（石井・小西2006）。

備前邑久窯跡群では唯一の9世紀代の須恵器窯跡（半地下式登窯）である。出土遺物は大多数が杯類で、壺もほとんど出土しておらず、甗は平底状のもの破片が1点しか出土しておらず、内外面ナデ調整のものである。この東6号窯跡は基本的に小物用の窯で、9世紀以前の一般的な叩き調整の甗は焼成されなかった可能性が推測される。須恵器以外では土錘が出土している。

(11) 油杉窯跡群（図14）

瀬戸内市長船町磯上・牛神・亀ヶ原に分布する高山1～3号窯跡、赤井谷窯跡、亀ヶ原窯跡の5基で構成される窯跡群であるが、発掘調査はなされておらず、詳細は不明である（池田1998e）。いずれも採集遺物で、時期幅があり、おおよそ11～12世紀と考えられている。

器種は、糸切り碗、双耳壺、鉢、甗で、碗は平高台と輪高台の両者がある。このほか単弁五葉蓮華文軒丸瓦、平瓦が採集されており、軒丸瓦は赤磐市の備前国分寺跡出土例と同範であることが確認されている。

3. 若干の検討

(1) 各器種の変遷（表1）

表1に、これまで述べてきた窯跡で確認できるおもな須恵器の種類を整理した。

杯・碗類 杯類は、大阪府陶邑窯跡群などで5世紀からみられる杯Hが、木鍋山窯跡（6世紀中葉頃）からみられるようになり、寒風1-II号窯跡まで確認できる。杯身の口縁部径が8.9～9.9cmと、今回取り扱った備前邑久窯跡群の杯Hのなかで最も小さくなり、これ以降の窯跡では現時点で確認されていない。そして備前邑久窯跡群ではこの頃、蓋と身が逆転し、これまで蓋であったものが身として使用されるようになったようである。

ちなみに、当時の中心地であった大和飛鳥地域や摂津難波地域では、641年に整地を開始した山田寺下層出土（奈良文化財研究所・歴史土器研究会2019, pp.194-195）の杯H身の口縁部径が9.2～10.4cm、戊申年（648）木簡が出土した摂津難波宮造営期の資料（大阪府埋蔵文化財調査研究センター2002調査谷16層）の杯H身の口縁部径が8.0～8.8cm、661年または672年の可能性が推測される木簡が出土した大和西橋遺跡資料（相原2019）が9.0～10.0cmであり、この頃杯Hの大きさが最も小さくなったようである⁽³⁾。

これらの遺跡資料を参考にすると、当然大まかなものであるが、備前邑久窯跡群では7世紀中葉からその少しあとまでこの杯Hが口径を小さくしながら、生産されたことが推測できそうである。天地が逆転した杯Hの身はその後確認できていないことから、使用されなくなり、杯Hの蓋であったものが身として使用され続けたことがこの表1から確認できる。この本来蓋であったものがその後いつまで使用されたかについては、十分確認されていないが、7世紀末～8世紀初め頃に比定されている寒風1-I号窯跡、8世紀前半の庄田工田窯跡、8世紀後半の佐山新池1号窯跡・佐山東山窯跡で少なからず出土しており、少なくとも8世紀後半代までは、杯Hの蓋であったものは身となって使用され続けたようである。ちなみにその口径は10～15cmの幅を持っている。

一方、一般的に小型化した杯Hと一部併行しながら使用されるつまみ付の杯Gは、この備前邑久窯跡群では前述の寒風1-II号窯跡で共伴して確認されている。その後、土橋窯跡、寒風2号窯跡、新林（宮囃）窯跡などでその蓋は確認されるが、身に関しては、よくわからない。

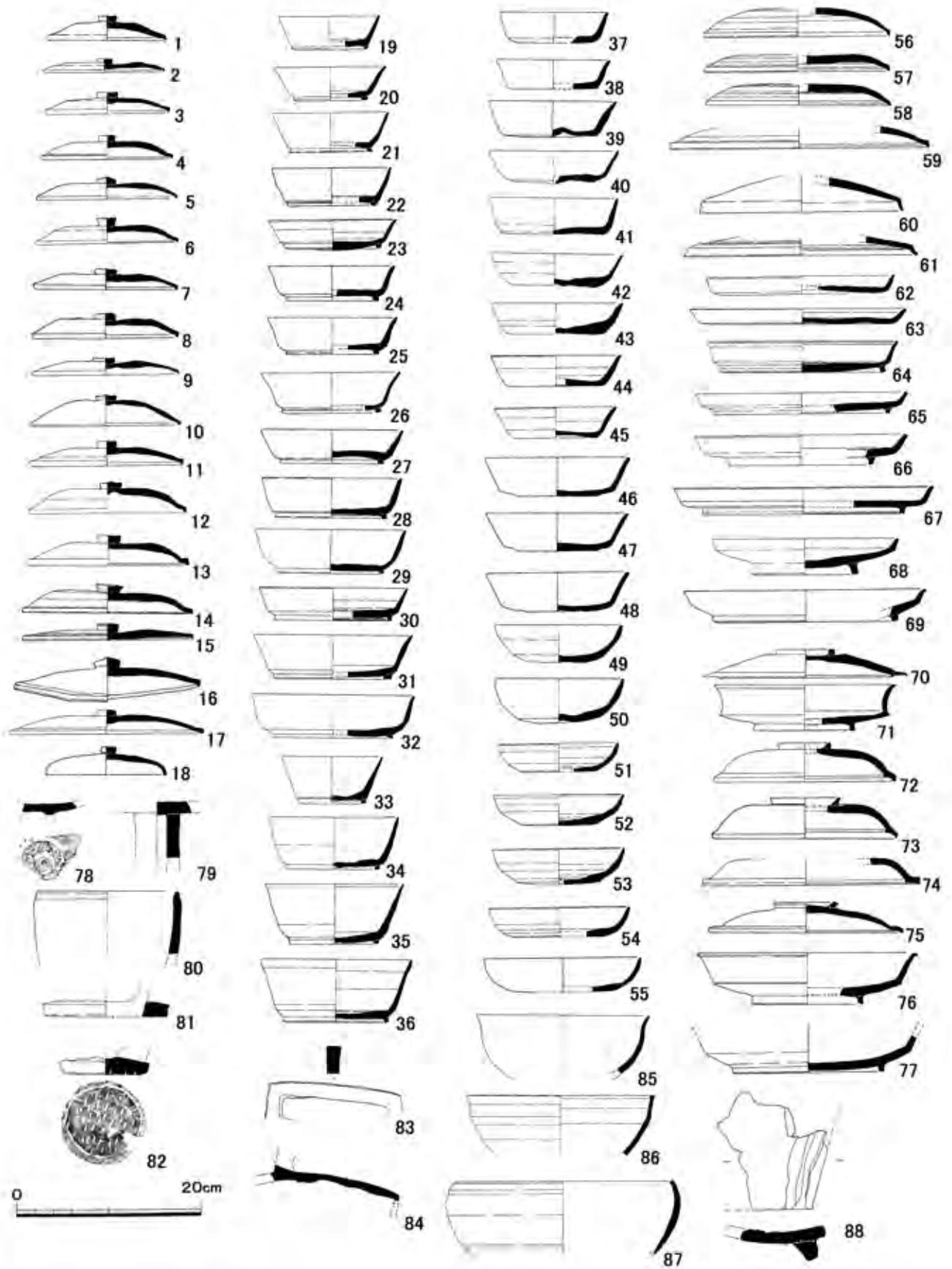


図10 佐山東山窯跡の須恵器 (1) (1/6)

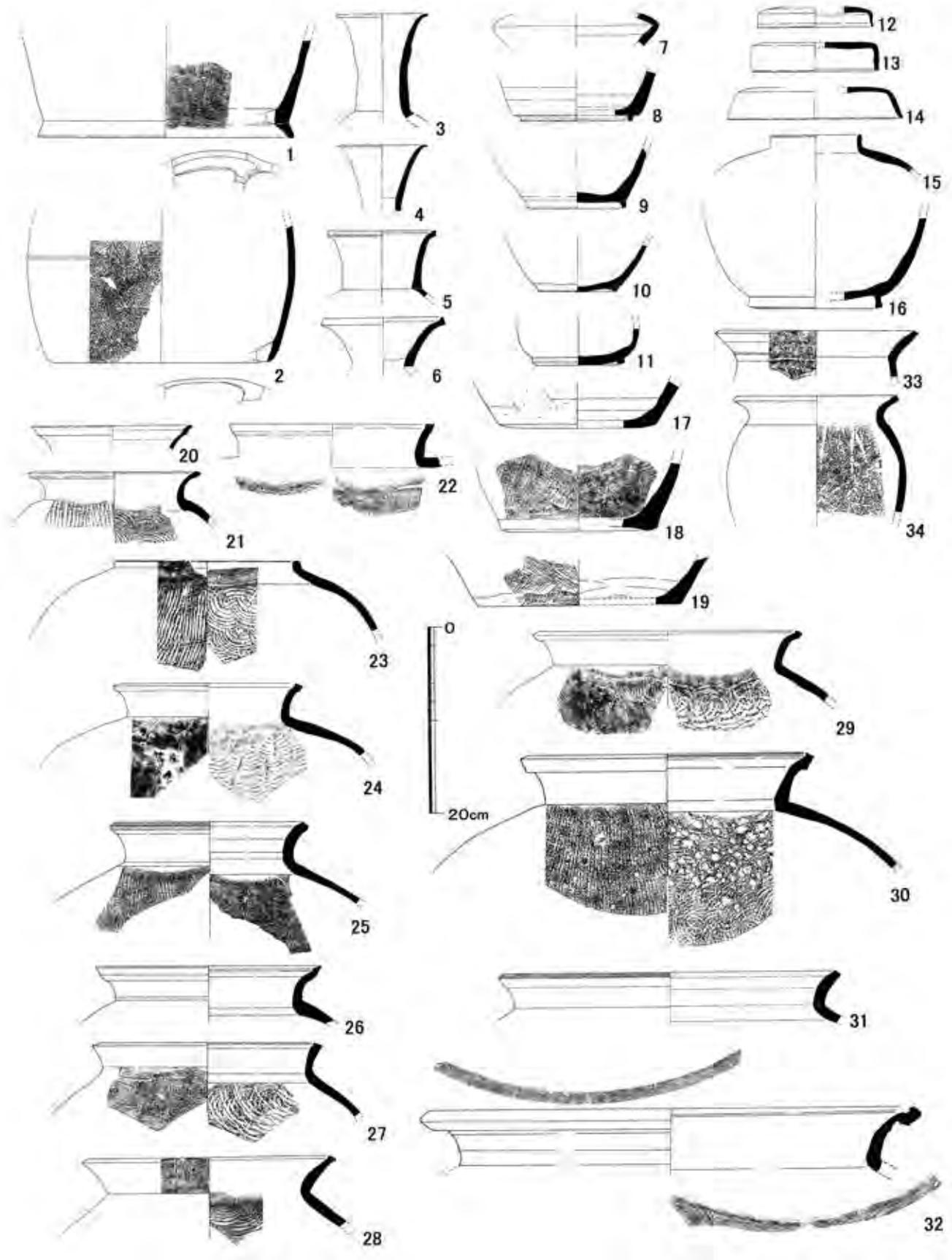


図11 佐山東山窯跡の須恵器 (2) (1/6)

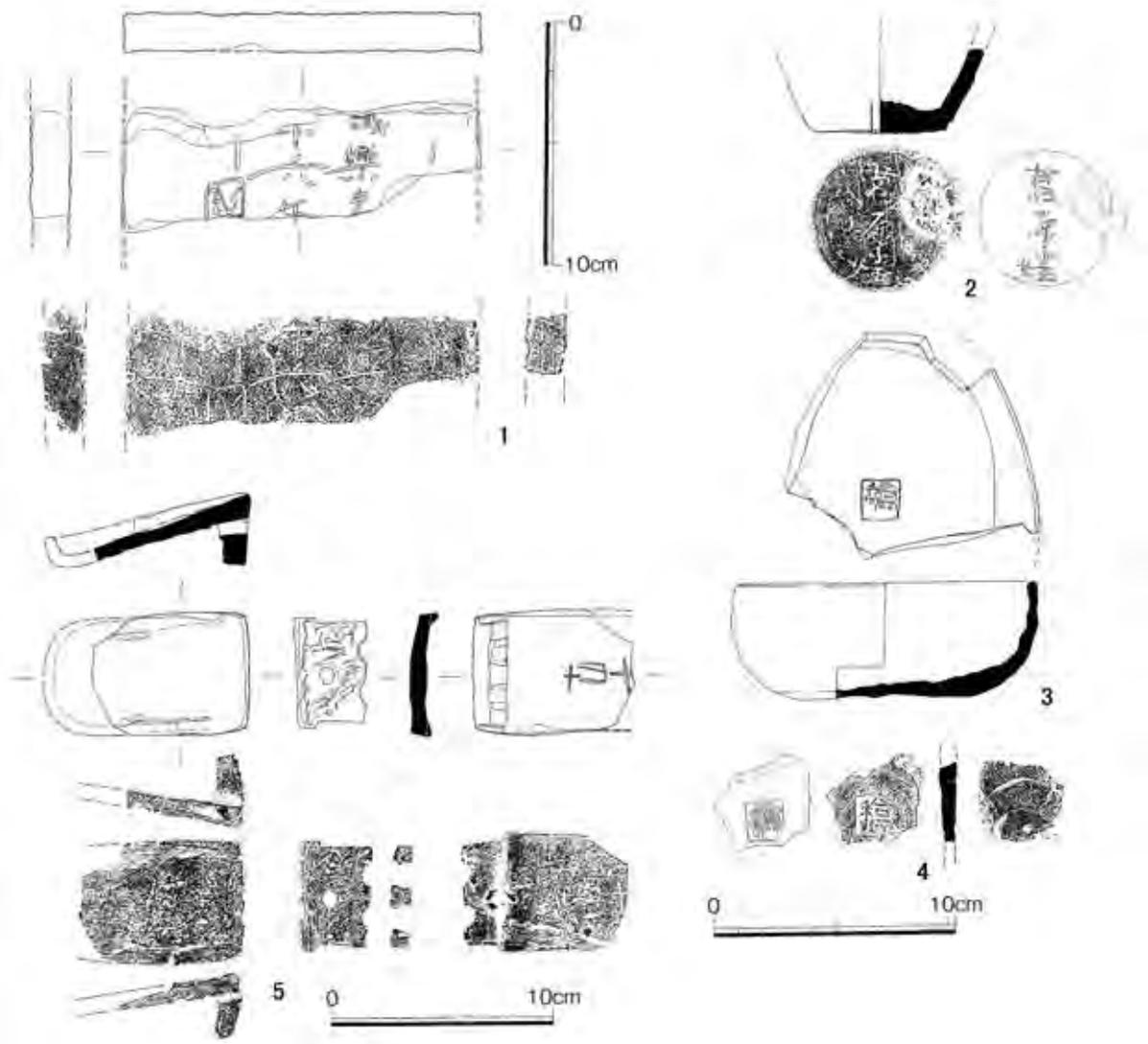


図12 佐山東山窯跡の文字関係資料 (1/3)

- 1 「□□十六年」ヘラ書き銘文埴
- 2 「葛原小玉女」ヘラ書き須恵器壺
- 3・4 「福」押印須恵器
- 5 施文風字硯

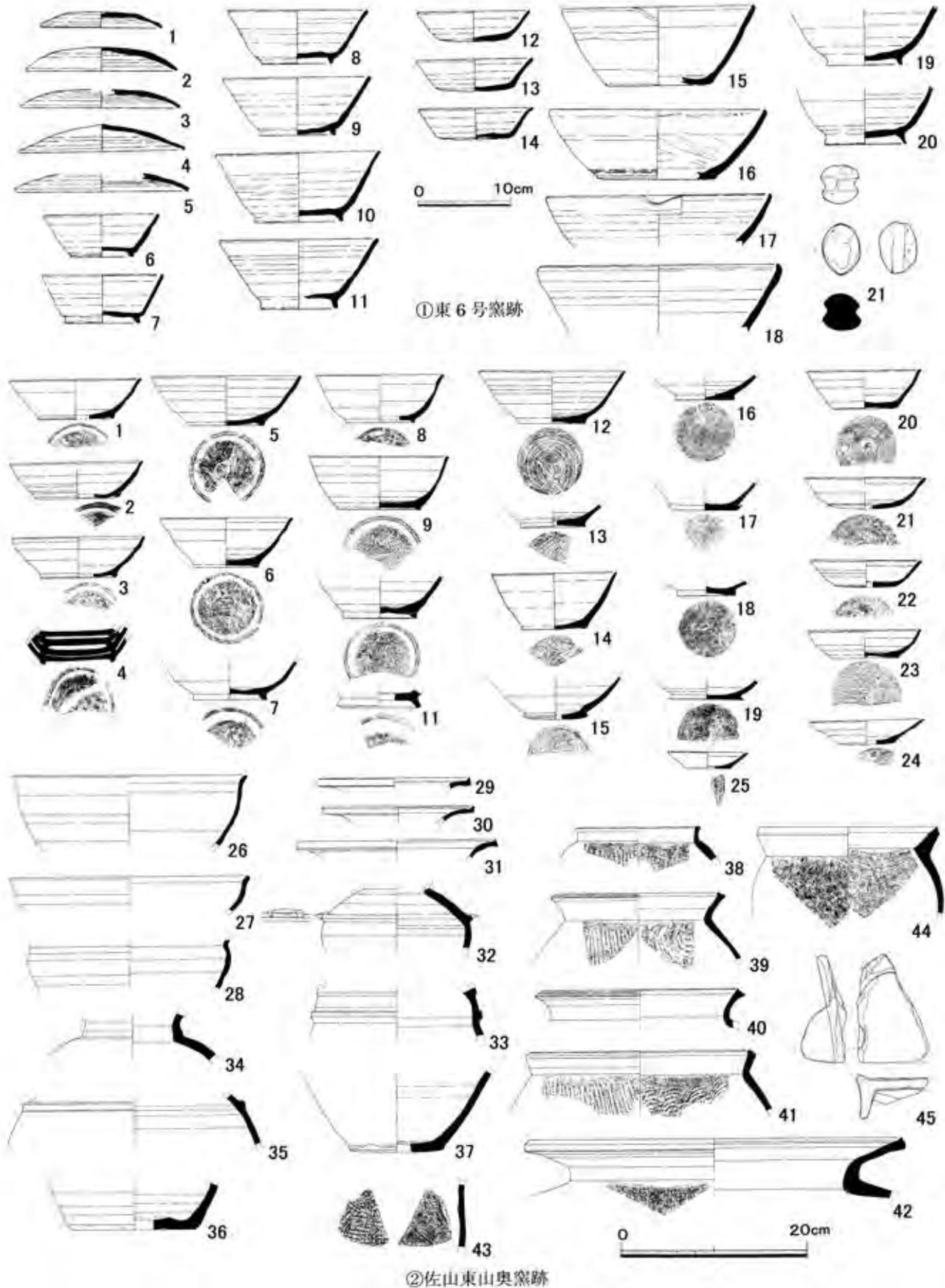


図13 東6号窯跡・佐山東山奥窯跡の須恵器 (1/6)

さらに、杯G身よりも口縁部が広がる杯Aはさほど点数は多くはないようであるが、前述の土橋窯跡、寒風2号窯跡、新林（宮嶋）窯跡などで確認される。この杯Aが杯G身の代わりとして使用されたことも推測される。ただ、これまで確認されている点数はあまり多くなく、前述の杯Hの蓋が身になったものと組んで使用された可能性も検討すべきかもしれない⁽⁴⁾。先ほど述べたようにその口径に幅があることもあわせて検討すべきであろう。

高台を持つ杯Bは杯Hのあと、杯Gを挟んでみられるようになる。正確な共伴関係はわからないが、寒風1-II号窯跡では杯Hと杯Gは共伴するが、杯Bは確認できていない。そして、杯Bが確認できる土橋窯跡、寒風2号窯跡、新林（宮嶋）窯跡などでは杯Hは確認できず、杯G蓋と共存している。これまで各地で述べられているように、備前邑久窯跡群においても杯H→杯G→杯Bと一部重なりながら変化したようである。

ただ、この杯Bの蓋において口縁端部にかえりを有するものは現時点で土橋窯跡のみであり、古くからいわれているように備前邑久窯跡群では、口縁部にかえりを有するものはあまり生産されず、早くにかえりを持たず、口縁端部を折り曲げたものに変ったのかもしれない。これは大和・摂津などでの流行の変化とずれているのかもしれない。

そして、この杯Bは、8世紀の庄田工田窯跡、佐山新池1号窯跡、佐山東山窯跡と杯の主流として生産され続けている。杯Aは8世紀前半の庄田工田窯跡ではよくわからないが、8世紀後半の佐山新池1号窯跡・佐山東山窯跡では多く生産されている。

その後、9世紀の東6号窯跡では、杯Bは蓋のつまみがなくなるようであるが、継続し、杯Aもみられる。ただ、杯Hの蓋が身となって使用されたものは確認できていない。9世紀に入る頃に使用されなくなるのであろうか。

さらに、この高台付の杯Bは10世紀と考えられている佐山東山奥窯跡においても、高台が体部と底部の境に付けられ、体部が直線的に外反する形でみることができると。ただ、蓋は確認できていない。9世紀代に使用されなくなったようである。

一方、この佐山東山奥窯跡では底部切り離し技法に、ヘラ切りと糸切りの両者がみられる。さらに、椀も出現する。そしてこのような輪高台付の杯・椀とともに、平高台の椀も共伴する。杯Aもヘラ切りと糸切りがみられる。

このように10世紀代の佐山東山奥窯跡において、杯と椀が共存し、椀へ、さらにヘラ切りと糸切りが共存し、糸切りへ変化する。平高台の出現もこの時期である。

以上のように、現時点では、備前邑久窯跡群では10世

紀に大きな転換があるようである。

また、金属器を模倣した稜椀が8世紀後半の佐山新池1号窯跡と佐山東山窯跡で出土している。ただ、両者ともに蓋が輪状つまみで、基本的に口縁部内面にかえりを有するという極めて珍しいものである。一般的な金属器模倣の稜椀の蓋は口縁部を折り曲げたもので、かえりを有するものはみることがなかった。

類例を検討した結果、筆者は朝鮮半島新羅土器の影響があるのではないかと考えるに至った（亀田・横山2013）。

高杯 高杯は有蓋・無蓋があるが、ここでは明確な違い・変遷はわからない。脚部に関しては、6世紀中葉前後の木鍋山窯跡で中脚一段透かしの高杯が確認でき、その後、6世紀後半の青木1号窯跡で長脚二段透かしの高杯が確認できる。その後は長脚のものは未確認で、中脚・短脚の高杯が8世紀に入る頃まで確認され、8世紀前半の庄田工田窯跡で短脚の高杯が比較的まとまって出土している。

皿・盤 一般的な皿や盤は、7世紀末～8世紀初め頃の寒風2号窯跡や新林（宮嶋）窯跡においてやや丸底気味のものが確認でき、8世紀後半の佐山新池1号窯跡において、そのような丸底気味のものときちんとした平底のものが確認できる。佐山東山窯跡では丸底気味のものはよくわからない。

また、8世紀後半の佐山新池1号窯跡や佐山東山窯跡では、皿や盤に脚を付けたものもみることができると。

甗 古墳時代の器種の一つである甗は、6世紀中葉頃の木鍋山窯跡では未確認であるが、6世紀後半以降の青木1号窯跡、比丘尼岩下窯跡、新林（宮嶋）窯跡（古）で確認できる。そして細かな時期はわからないが、寒風1号窯跡灰原では一般的な丸底のもの、平底のもの、そして高台を持つものがあり、平底のものには明確な筒状注ぎ口を有している。また寒風2号窯跡では丸底無高台の甗が出土している。そして土橋窯跡でも高台付の小さな筒状注ぎ口を有するものがあることが最近確認できた⁽⁵⁾。点数が少なく、詳細は不明であるが、ひとまず丸底の甗は7世紀代まで生産され、7世紀代のどこかで高台付のものが生産され、その後、現時点では8世紀前半代の庄田工田窯跡以降では甗の出土は確認されていない。

装飾須恵器 備前邑久窯跡群周辺地域ではまとまって装飾須恵器が出土することが知られている（牛窓町史編纂委員会1997、長船町史編纂委員会1998など）。装飾須恵器にはいくつかの種類があるが、6世紀末～7世紀前半頃と考えられている比丘尼岩下窯跡で子壺の破片（図2④21）が採集されている。

台付壺の肩部などに子壺を貼り付けたものと推測される。消費遺跡では装飾須恵器はまれにみることができると。

が、生産遺跡での出土は珍しく、ある面で当然といえば当然ではあるが、備前邑久窯跡群で装飾須恵器が生産されていたことを証明できる貴重な資料である。

時間的な変遷などはこれ1点ではわからない。

平瓶・提瓶・横瓶 平瓶・提瓶・横瓶のうち、最も多く確認されているものが平瓶である。平瓶は胴部が丸いものと天井部と胴部の境目に稜線を持つものに大別され、小稿ではわかりやすいように前者を丸型、後者を角型と呼んだ。一般的に古墳時代のものは丸型で、7世紀頃から角型に変わる。備前邑久窯跡群では7世紀代の寒風1号窯跡、7世紀中頃～8世紀初め頃の寒風2号窯跡で両者(図6①15・16)が共存しており、8世紀前半の庄田工田窯跡(図7-36)、8世紀後半の佐山東山窯跡(図10-83・84)で角型が確認されている。ここには図示していないが、和気郡大田原藤原古墳出土とされる「大久」へラ書きの平瓶は7世紀末～8世紀前半のものと推測され、ちょうど丸型から平型に変わった段階の特徴を持っている(間壁1986)。

また、佐山新池1号窯跡と佐山東山窯跡ではやや大型の平瓶が出土している。

提瓶は、今回の検討資料では確認できなかった。

横瓶は、新林(宮嶮)窯跡(図3-75)で確認でき、庄田工田窯跡の円盤を貼り付け、カキ目を施したものの(図7-37)もその可能性が推測される。ただ、この庄田工田窯跡例の円盤の内面には全面に布目圧痕がみられ、興味深い。

いずれにせよ、提瓶や横瓶はあまり多くは生産されなかったのであろうか。

鉢類(把手付鉢・脚台付鉢・こね鉢・鉄鉢形鉢・大型鉢) 鉢類はさほど多く生産されてはいないようであるが、それぞれの窯跡で少しずつ確認されている。

一般的な広口の鉢に把手を付けた把手付鉢が7世紀代の新林(宮嶮)窯跡で出土している(図3-74)。8世紀前半の庄田工田窯跡や8世紀後半の佐山新池1号窯跡で扁平な把手が出土している(図7-39・40, 図9-21)が、甌などに付く可能性もあり、把手付鉢とは限定できない。

7世紀代のこね鉢は寒風1・2号窯跡(図5-40, 図6①19)で出土し、8世紀後半の佐山東山窯跡でも同様の外底部に小さな刺突痕を持つものが出土している(図10-82)。同じ8世紀後半の佐山新池1号窯跡でもこね鉢が出土しているが、こちらの外底部には刺突痕はみられない(図8-100~102)。

そして9世紀の東6号窯跡では、これまでの厚底のこね鉢ではなく、のちのすり鉢に展開する一般的な鉢形のこね鉢が出土している。厚底のものがいつ生産されなくなるのかはわからないが、こね鉢に関しては、この8世紀後半から9世紀の間に展開があるようである(森川

2019b)。

また、珍しい鉢として、金属器模倣の鉄鉢形鉢が8世紀後半の佐山東山窯跡で出土している(図10-87)。後述する文字資料の項でも触れるが、佐山東山窯跡は多くの文字資料を出土し、墓誌または買地券の可能性のある埴も出土している。この鉄鉢形鉢の供給先はわからないが、この周辺の寺院や国衙などの仏教施設に供給したのであろうか。

そして、7世紀末～8世紀初めの新林(宮嶮)窯跡(図3-85・86)、8世紀前半の庄田工田窯跡(図7-53)、さざらし奥池窯跡、8世紀後半の佐山新池1号窯跡(図9-19)で口径40cmを超える大型平底鉢(洗)が出土している。把手が付くもの・付かないものの両者があり、その把手もいろいろな形がある。これらも一般的な集落で使うものではなく、役所や寺院など用のものであろう。

甌 甌は8世紀前半の庄田工田窯跡(図7-38)、8世紀後半の佐山新池1号窯跡(図8-103)と佐山東山窯跡(図11-1・2)で出土している。形態的には底部に高台を持つものと持たないものがあり、1+数個の蒸気孔を持つもので、その外側の蒸気孔は、楕円形、長楕円形がある。その胎土と調整技法と形態の特徴から、佐山東山窯跡の無高台のもの(図11-2)は本来土師器として作ろうとしたもの、佐山東山窯跡と佐山新池1号窯跡の高台付のものは須恵器として作ろうとしたものではないかと考えている。

後述する土師系の甕などととも、8世紀後半における須恵器工人と土師器工人の「協業」の一形態を示しているのかもしれない。

また、窯跡出土資料ではないが、8世紀前半の瀬戸内市長船町西谷遺跡で無高台の1+5孔の甌が出土している(福田編1985)。これは無高台ではあるが、須恵器系のようなものである。西谷遺跡は古代須恵郷のなかにあり、須恵器搬出のための集積場ではないかと考えられている。

このように須恵器系と土師器系で十分な区別はできないが、現時点における備前邑久窯跡群内の須恵器甌生産は8世紀前半まで遡りうるようである。

硯 確実に窯跡から出土したと考える硯は7世紀中葉～8世紀初めの寒風2号窯跡のものが最も古く、鳥形把手付中空硯、低脚硯、圈足硯が出土している。また珍しい筆立て付円面硯も出土している(図4④13, 図6①22-26)。1-I号窯跡では大型円面硯が出土している(図4⑤5)。1-II号窯跡でも鳥形把手が出土しているが、これは上層出土であり、近くの窯からの紛れ込みの可能性もある。いずれにせよ、寒風窯跡群では7世紀中葉～8世紀初め頃に多くの陶硯が生産されたようである(亀田・平山2016)。

次いで、庄田工田窯跡で、蹄脚硯と円面硯が出土して

いる（図7-50～52）。蹄脚硯は円面硯のなかでランクの高いものと考えられており、岡山県内では備前ハガ遺跡・天神河原遺跡・百間川米田遺跡、備中津寺遺跡、美作国府跡・平遺跡で出土している⁽⁶⁾。備前の3遺跡は備前国府に関わる遺跡と考えられ、備中の津寺遺跡も備中の国に関わる官衙遺跡、そして美作国府跡はまさに美作の国府跡であり、平遺跡は勝田郡の郡家関連と考えられており、いずれも吉備の主要な官衙関連遺跡である。庄田工田窯跡の蹄脚硯がどこに運ばれたのかは現時点ではよくわかっていないが、この窯が「備前国」関与の窯であることはこれによっても十分考えられる。

このほか、瀬戸内市牛窓町流尾窯跡（8世紀?）、瀬戸内市邑久町さざらし中池荒手土手上窯跡（7～8世紀）で採集され、瀬戸内市長船町大谷口遺跡（7～8世紀）、瀬戸内市長船町花尻南遺跡（8世紀）で円面硯が確認されている。備前邑久窯跡群では7世紀後半から8世紀前半のいくつかの窯で陶硯が生産されていたものと推測される。ただ、そのなかで庄田工田窯跡のように蹄脚硯を生産する窯が普通にあったのか、それとも庄田工田窯跡が特別なのか、今後の検討が必要である。

そして8世紀後半の佐山東山窯跡（図12-5）と10世紀の佐山東山奥窯跡（図13②45）で風字硯が出土している。前者の硯は小型の文様が施されたもので、後者の硯はやや焼成が甘い一般的な風字硯である。風字硯は8世紀後半以降に出現すると考えられており（伊藤1992）、佐山東山窯跡の資料がこの時期で問題ないのであれば、初期段階の風字硯となる。ただ、佐山東山窯跡では一部10世紀の須恵器も生産された可能性があり、こちらに伴うのであれば、10世紀の風字硯となり、近接する佐山東山窯跡と佐山東山奥窯跡で2種の風字硯が生産されたことになる。

各種壺 壺は後述する甕と同形態で小型の一般的な壺とともに、短頸壺、直口壺、長頸壺、脚付壺、耳付壺など多様なものがある。

備前邑久窯跡群で一般的にみられる短頸壺の蓋は、例えば7世紀後半の寒風2号窯跡例（図4④11・12、図6①11）のように天井部はやや丸みを持ち、口縁部に向かって少し広がり、そして口縁端部で内側に少し折れ曲げるものが多くみられる。杯身のようにも見えるが、備前邑久窯跡群ではこの形態のものは図6①11のように溶着したものが時々みられ、短頸壺の専用の蓋として作られたようである。このような形の壺蓋は他地域でもみられるのであろうか。時期的には少なくとも7世紀中葉頃からみられ、8世紀前半の庄田工田窯跡（図7-41～43）まではみることができる。そして8世紀後半の佐山新池1号窯跡や佐山東山窯跡では確認できていない。

また、壺蓋として特徴的なものの一つが、葉壺形壺の蓋である。中央に宝珠形・扁平宝珠形のつまみを持ち、

天井部は平らで、口縁部はほぼ直角に折れ曲がる。壺の真っ直ぐに立つ口の形に対応している。8世紀後半の佐山新池1号窯跡（図9-6～9）、佐山東山窯跡（図11-12～14）にみることができる。現時点ではその前後では未確認である。

長頸壺は寒風1号窯跡の資料（図5-42～46）が良好な資料である。多少の時期幅はあるが、肩部が丸いもの、角張るものの両者あり、高台を持つもの、持たないものがある。また類似の胴部形態で頸が短いものもある（図11-5・6）。

耳付壺は、耳は突起状、環状などの形があり、球形の胴部に付くものとともに、平安時代にはやや長胴形のものに付くものがみられる（図13-32、図14-14）。

壺甕類 小稿での壺甕類は、一般的な球形の胴部のもので、明確に壺と甕を区別できないものがあるため、合わせて説明する（亀田2018）。

【大きさ】 窯跡出土資料の甕の大きさに関しては、全体像がわかるものはほとんどない。6世紀中葉の木鍋山窯跡では口径が11cm、24cmのものがある。

7～8世紀初めの寒風窯跡群では、1-Ⅲ号窯跡、1-Ⅱ号窯跡、3号窯跡では口径がわかるものは出土していない。1-I号窯跡では口径16～22cmのものがあり、2号窯跡では口径16～20cmのものがある。寒風窯跡群の7世紀末～8世紀初めの工房と考えられている竪穴遺構3内では口径17～24cmのものが少々あり、口径50cmのものが1点出土している。これらを見ると、7～8世紀初めの寒風窯跡群で生産された壺甕類は、ほとんどが16～25cmの壺というか、小型の甕であり、1点50cm大甕があることになる。

7世紀前半～8世紀初め頃の新林（宮嶮）窯跡では、口径16～21cm、25～32cm、41cmの3グループがある。8世紀前半の庄田工田窯跡の壺甕類の口径は20～26cmが比較的多く、32cm、42cmがそれぞれ1点ずつ、そして52～56cmのものが3点出土している。

8世紀後半の佐山新池1号窯跡では、口径18～23cm、28～31cm、37～42cm、46～54cmの4グループがあり、同じく8世紀後半の佐山東山窯跡では、口径16～24cmが最も多く、26～30cm、34～39cm、50cm以上の4グループに分けられそうである。

9世紀の東6号窯跡では甕は生産されていないようで小物用の窯であったと推測され、10世紀の佐山東山奥窯跡では、点数は少ないが、口径17～23cmと40cmの2グループの壺甕類が確認できる。

以上のように発掘調査資料のデータからは、口径16～25cmの壺というか、小型の甕が各時期、最も多く、時間的な変遷はわからないが、口径30cm前後、40cm前後の小グループがあり、50cm前後以上のものが、7～8世紀に継続的に1グループあるようである。

九州最大の須恵器窯跡群である牛頸窯跡群の牛頸ハセムシ窯跡群12地区Ⅸ号窯跡灰原から出土した甕に「大甕」「和銅六年」(713年)などがへら書きされたものがある(中村1989)。2個体口径が復元でき、47.0cmと52.6cmである。この数値を備前邑久窯跡群の甕に当てはめると、口径50cm前後以上のものが「大甕」→「大甕」と考えて良さそうである。つまり備前邑久窯跡群では比較的多くの口径20cm前後の小型甕(壺?)と50cm前後の甕(大甕・大甕)が継続的に生産され、時間的な変遷はわからないが、その間の中型甕が生産されていたものと推測される。

また、9世紀の東6号窯跡は小物用の窯であったようで、壺甕類が確認されておらず、器種によって焼き分けられた窯が作られ、使用されたようである。さらに、10世紀の佐山東山奥窯跡では一部口径約40cmの甕もあるが、大多数は杯・椀類と壺類で、大甕などは焼成されていないのかもしれない。11～12世紀の油杉窯跡群に関しては、採集資料であり、詳細は不明である。つまり、平安時代の備前邑久窯跡群における大甕生産は現時点ではよくわからない。

【頸部文様】 備前邑久窯跡群で確認できる甕の頸部には、文様をもともと飾らないものと飾るものがある。筆者は現時点でその違いの意味はわかっていない。

その文様は櫛描き波状文と斜線文がある。これらは回転を利用して施文された一般的な沈線文との組み合わせが多い。また小稿では沈線文のみの場合はひとまず無文としておく。有文と無文の比率は出していないが、無文のものが多いようである。

櫛描き波状文は、発掘調査した窯跡では寒風窯跡群1-II号窯跡(図4-①31)、1-I号窯跡(図4-⑤7)、寒風窯跡群竪穴遺構3、新林(宮嶮)窯跡(図3-79～82)で確認されている。時期は7世紀前半～8世紀初めで、口縁部は基本的にあまり厚みを持たないものが多く、やや内彎気味に処理しているものもみられる。波状文の段数は確認できたなかでは4段が最も多いようである。寒風窯跡群1-III号窯跡と2号窯跡、3号窯跡では櫛描き波状文の例は確認されていない。

8世紀前半の庄田工田窯跡では比較的多くの甕の破片は出土しているが、基本的に無文で、唯一図7-60が確認された。同じく8世紀前半の奥更谷窯跡では点数が少ないこともあるかもしれないが、頸部に文様を持つものは確認できず、そして8世紀後半以降の佐山新池1号窯跡、佐山東山窯跡群、東6号窯跡でも頸部文様は確認されていない。つまり、備前邑久窯跡群においては、8世紀前半のある時期に甕の頸部文様は施されなくなったものと考えられる。

また以前検討したときに比較的多くみられた「コの字形」口縁甕には文様は施文されていないようであり、口

縁部形態と櫛描き波状文などの施文には関連があるのかもしれない(亀田2018)。

このほか、発掘調査資料ではない(7)が、櫛描き波状文例は長船町五郎ヶ市池窯跡(6世紀後半～7世紀中葉)、邑久町烏谷窯跡(6世紀末～7世紀中葉)・カンニャクバ窯跡(7世紀前半～8世紀前半)・広高窯跡(6世紀末～7世紀中葉)・新山2号窯跡(6世紀末～7世紀前半)・三谷窯跡(8世紀前半)、邑久町・牛窓町土橋窯跡(7世紀中葉～8世紀初め)、牛窓町平田窯跡(7世紀中葉～8世紀初め)、かべら窯跡(7～8世紀)などで採集されている。やはり、8世紀初め～前半に甕の頸部文様な施されなくなった可能性が高そうである。

また、発掘調査例では確認されていないが、斜線文が長船町の高山北窯跡(6世紀末～7世紀初め)・奥池中池1号窯跡(6世紀末～7世紀中葉)、邑久町広高窯跡(6世紀末～7世紀中葉)で採集されている。

さらに斜線文と櫛描き波状文、両者を描いたものが邑久町烏谷窯跡・広高窯跡で採集されている。

このように甕口縁部の文様としては、櫛描き波状文と斜線文があり、前者が多く、口縁部形態は口縁部をあまり肥厚させないものに多く施文されているようである。現時点では6世紀後半から波状文、そしてやや遅れて斜線文がみられるようになり、8世紀前半頃にはみられなくなるようである。

陶棺・瓦塔・骨蔵器 備前邑久窯跡群で発掘調査された陶棺は新林(宮嶮)窯跡例(図3-89)と寒風1-I号窯跡例(図4⑤9)である。前者は推定幅約70cmの寄棟式家形陶棺である。この窯跡では7世紀前半～8世紀初め頃の須恵器が出土している。後者は復元幅約72cmの家形陶棺の屋根部破片である。7世紀末～8世紀初めの須恵器が出土している。

このほか、やや不確実なものも含め、備前市大城池窯跡、大城谷北窯跡、瀬戸内市長船町花尻南窯跡群、邑久町天堤窯跡(?)・庄田工田窯跡(?), 牛窓町古市村窯跡・寒風2号窯跡(?)で採集されている(亀田2006c)。

備前邑久窯跡群周辺の7～8世紀前半の古墳では、須恵質家形陶棺が比較的出土しており(牛窓町史編纂委員会1997、長船町史編纂委員会1998、邑久町史編纂委員会2006)、寒風窯跡群内の寒風古墳でも陶棺が納められていた。時期は出土須恵器から7世紀末～8世紀初め頃と推測されている。この古墳の無袖式横穴式石室床面には須恵器甕片が全面に敷かれ、閉塞施設として2次的に転用された鴟尾片が出土している。寒風窯跡群産と推測されている(馬場ほか2009)。

瓦塔とするものは、不確実ではあるが、8世紀後半の佐山新池1号窯跡で出土した家形のものである(図9-34・35)。壁の厚さが約1cmしかなく、ひとまず瓦塔と

推測している。家形の骨蔵器の可能性もある。またどの窯跡かは特定できないが、寒風窯跡群で小型鴟尾が出土しており（牛窓町史編纂委員会1997, p.246）、瓦塔（陶製仏殿）の鴟尾である可能性がある。

備前邑久窯跡群周辺での瓦塔は、長船町須恵廃寺と岡山市吉井廃寺で採集されている（宇垣1985, 亀田2002）。佐山新池1号窯跡のものとは特徴が異なる。今後、備前邑久窯跡群のどこかの窯跡でみつかるかもしれない。

鴟尾・瓦 鴟尾も新林（宮嶮）窯跡（図3-88）と寒風1-I号窯跡（図4⑤⑧）で確認されている。7世紀末～8世紀初め頃のものとして推測される。前者と同じグループの鴟尾が前述のごとく大阪市細工谷遺跡に運ばれたと考えられており、このような大型品も遠距離供給されたことがわかる貴重品である。後者の鴟尾の確実な供給先は確認できていないが、この寒風窯跡群では大量の鴟尾片が出土・採集されており、近年の研究で岡山県内のみならず香川県にも供給された可能性が提示されている（白石2020）。

備前邑久窯跡群の須恵器窯跡での瓦の確認は極めて少なく、本当に焼成されたのかも含めて今後の検討が必要である。

確実な発掘調査出土例は、8世紀後半の佐山新池1号窯跡の一枚作り平瓦1点のみである。しかし、灰原近くのトレンチ包含層で出土しており、確実にこの窯で生産されたとはいえない資料である。

11～12世紀の油杉窯跡群では、軒丸瓦と平瓦が採集されており、この窯跡群での製品と考えて問題ないであろう。そして軒丸瓦は同範関係から備前国分寺に供給されたと考えられている。また、邑久町福谷湯通窯跡でも糸切り椀とともに瓦が採集されている（中野2006b）。

このほか、瀬戸内市長船町奥池中池2号窯跡で一枚作りの縄目タタキ平瓦片2点が採集されており、位置的には須恵廃寺と関わる可能性もあるが、ここではこの平瓦のみである。隣接する1号窯跡では7世紀前半前後の須恵器のみで、両者の関係はよくわからない（池田1998b）。

また、邑久町庄田工田窯跡に近接する7世紀末～8世紀前半のさざらし奥池窯跡で格子目タタキの桶巻作り平瓦片を1点採集した。瓦はこれのみであり、よくわからない。

瓦窯は、長船町服部廃寺関連として、寺跡の東約3kmの磯上地区に位置する生砂（産土）池窯跡、新池窯跡、正伝名池窯跡がある（池田1998d）。生砂池窯跡では8世紀初め頃の須恵器杯なども出土しており、いわゆる瓦陶兼業窯ではあるが、瓦窯での一時的な須恵器生産と考えられ、須恵器窯での一時的な瓦生産ではないと考えている。

このように備前邑久窯跡群の須恵器窯における瓦生産

はほとんどわかっていない状況である。

文字資料 備前邑久窯跡群出土の文字資料は、8ヶ所の窯跡で出土・採集されている（亀田2015）。時期的には寒風窯跡群のものが7世紀末～8世紀初め頃のもので最も古い。2文字のものは「大皮」で、ほかは「上」「下」である。その意味に関してはよくわからない。

次いで、8世紀前半代のものが、庄田工田窯跡の「上」、三谷（奥三谷）窯跡の「大」、8世紀後半のものがさざらし奥池窯跡の「上」、佐山新池1号窯跡の「大」、そして佐山東山窯跡の「・・饗樂図・・」「□□十六年・・」「・・?國・・」,「葛原小玉女」,「福」である。

最後の「福」は押印されたもので、2点出土している。それ以外はいずれもヘラ書きである。

これらの文字資料をみると、基本は一字で、「上」「下」「大」で、例えば「大」は「大伯」（旧邑久郡）などの意味はあると思うが、よくわからない。「大皮」はかなりの達筆で寒風1号窯跡で3点の杯類に書かれたものが出土しており、それなりの意味はあるのであろうが、現時点ではよくわからない。

ただ、佐山東山窯跡の「葛原小玉女」は明らかに人名で、この時期にこの備前邑久窯跡群周辺にこのような女性がいたことを教えてくれており、「□□十六年」埴の「十六年」は共伴する須恵器から天平16年（744）か延暦16年（797）年の可能性が高く、そして埴自体は墓誌または買地券の可能性が推測される。つまり、この埴によってこの窯自体のおおよその年代が補強され、さらにこの地域での「墓誌」または「買地券」文化が推測される。そして「福」押印須恵器もこの地域での8世紀後半の「ハンコ」文化を教えてくれるのである。

点数が少なく、明確なことはいえないが、備前邑久窯跡群では7世紀末頃から須恵器に一文字や二文字を記すことがなされ始めるようである。これは古墳出土品と推測される平瓶に「大久」銘があるものと整合する。この「大久」はこの地域の古い地名「大伯郡」を示すと考えられている。

そして、8世紀後半の佐山東山窯跡の文字資料は、やや特別なものかもしれない。全国的にも一つの窯跡でこれだけの点数が出土する例は、福岡県牛頸窯跡群の牛頸ハセムシ窯跡群12地区Ⅸ号窯跡（和銅6年：713年）が有名ではあるが、やはり珍しい。

このような文字文化の展開は備前邑久窯跡群の須恵器生産・器種構成の変化（墓誌・買地券の生産など）にも関わりがある可能性を推測させる。

土師器系資料 本来土師器として生産される器種を須恵器窯で生産したと推測されるものが、8世紀後半の佐山東山窯跡と10世紀の佐山東山奥窯跡で確認できる（亀田2017）。器種は甕、甗、カマドである。形態的な特徴と調整技法と胎土などで識別している。この時期、土師

器は一般的に女性が生産していたと推測されており、この推測が正しければ、この2ヵ所の窯の周辺には土師器作りの女性がいたものと推測されることになる。

岡山県浅口市上竹西の坊遺跡では7世紀前半～8世紀代の須恵器窯が確認され、8世紀中頃～後半の土師器窯と推測されるものが近接して発掘調査されている（井上ほか1988）。このような例が各地でみられるのか、それとも一地方でのあり方なのかかわからないが、時期的にも佐山東山窯跡の例と近く、注目しておきたい。

(2) 器種構成の変遷

以上、器種ごとに大まかにその変遷をみてきた。ここでは、それらを全体的にみていきたい。

まず、6世紀～7世紀前半の窯跡では、古墳時代に一般的な杯H、高杯、甕、壺、甕類をみることができる。数は少ないが、装飾須恵器もこの段階のものである。

そして、杯Hが小型化し、蓋と身が逆転する頃、杯Gが出現する。大和や摂津の宮都周辺での類似資料と比較すると、都で最も小型化するのが7世紀中葉頃のものであるので、備前邑久窯跡群における杯Hの小型化の時期もその頃と考えて大きな違いはないようである。

このことは近年進められている宮都周辺における備前邑久窯跡群産須恵器の抽出作業でも推測できそうである。胎土分析を行えばより確実性を増すものと推測されるが、ひとまず、前期難波宮石組関連客土（7a層）、甘樫丘東麓遺跡SK184、西橋遺跡谷1、石神遺跡B期整地土・SD640などで出土している土器が備前邑久窯跡群産のものとして推測されている（新田2019, p.137図21）⁽⁸⁾。

これらは宮都周辺では7世紀中葉から8世紀初め頃のものと考えられており、この年代観によれば、備前邑久窯跡群では7世紀中葉頃に都の新しい器種構成、杯Gの受け入れがなされ、杯Hは蓋と身が逆転するようである。ただ、天地逆転した身は蓋として使用されず、なくなり、蓋は身になり、その後8世紀後半まで使用され続けたようである。このように長期間蓋が身として使用されることは近畿地方などでもあるのであろうか。ほかの地方でのあり方を検討しなければならないが、現時点ではこのようなあり方は備前邑久窯跡群の特徴といえるのかもしれない。

また、このような変化に少し遅れて入ってくる杯Bのあり方に関しても、蓋の口縁部にかえりを持つものはあまり確認されていない。これも備前邑久窯跡群の須恵器の特徴かもしれない。

7世紀中葉～8世紀初め頃の寒風窯跡群などでの須恵器生産のあり方は、碗の出現、皿・盤類の出現、文字資料の出現など、中央の動向を反映し始めているようである。都のものとはかなり異なるが、鷗尾を生産し始めることも同様の動きであろう。ただ、これらの窯で生産さ

れた陶棺は備前独自のものであろう。

8世紀前半になると庄田工田窯跡・さざらし奥池窯跡などで宮都周辺のものより類似する器種が生産され、展開していくようである。

ただ、8世紀後半には佐山東山窯跡で土師器系のもので生産される。これはこの佐山地域なりの個性なのか、それとも陶邑窯などでも土師器工人の関与がそれなりにみられるのであろうか。後日検討してみたい。

9世紀以降に関しては、発掘調査された窯跡が少なく、まだまだ今後の検討課題は多いが、明らかにそれまでの須恵器生産のあり方とは大きく異なっている。特に10世紀には底部ヘラ切り技法に加えて糸切り技法が入り、形態も杯に加えて椀が生産されるようになる。耳付の長胴壺も生産されている。これらについては隣接する播磨地域の須恵器と比較する必要があるが、まさに今後の大きな課題であるが、少なくともここでより大きな転換があることは間違いないと考えている。

備前邑久窯跡群における古代から中世への転換の始まりがここにあるのではないかと考えている。

4. おわりに

これまで述べてきたように備前邑久窯跡群は、6世紀中葉に瀬戸内市木鍋山窯跡が操業を開始し、12世紀、現在の備前市伊部地域に移るまでの約550年間に旧の邑久郡地域（現在の瀬戸内市・備前市）に営まれた須恵器窯跡群である。約130基確認されているが、発掘調査されたものは12基しかなく、その生産された須恵器の器種構成は十分把握されていない。

小稿は不十分ながら発掘調査された窯跡資料を中心に、未発掘ながら多少概要を知りうる窯跡資料を含めて、6世紀から11世紀頃までの備前邑久窯跡群で生産された須恵器の器種構成を整理したものである。

7世紀中葉頃からの飛鳥地域・難波地域への須恵器供給も含めた器種構成の変化は、備前邑久窯跡群での須恵器生産が都との関わりの中かでより動き始めたことを示しているといえよう。杯Hの蓋と身の逆転と蓋が身になり、8世紀後半まで残ること、杯Bの蓋にかえりを持つものがあまりみられないこと、家形陶棺の生産、特徴的な鷗尾の生産などはこの地域の個性であろう。

都への供給を意識しているといわれる7世紀後半～8世紀初めの寒風窯跡群における須恵器生産、ただ、その後8世紀前半の窯はやや内陸に入り、8世紀後半には備前市佐山地域にその生産の中心を移していくようである。

8世紀代の備前邑久窯跡群における須恵器生産は中央と結びつきながらもこの地域の個性を残しながら展開したようである。

そして、9世紀以降はよくわからない点も多いが、8世紀代とは異なる展開をし、10世紀には中世備前焼への大きな転換が佐山東山奥窯跡などで始まったようである。

小稿をなすにあたり、下記の方々にはいろいろとお世話になりました。末筆ながら記して謝意を表します。敬称は省略させていただきました（五十音順）。

石井啓、石井翔真、伊藤晃、小田裕樹、尾野善裕、白石純、大谷博志、徳澤啓一、畠山唯達、馬場昌一、平山晃基、福田正継、三阪一徳、森内秀造、横山聖、若松拳史

なお、小稿は、日本学術振興会研究費補助金（基盤研究（B））「西日本における地方窯業生産の研究－古墳時代・古代から中世へ－」（代表：亀田修一）（課題番号：17H02420）の研究成果の一部を含んでいる。

註

- (1) 備前邑久窯跡群に関する代表的な研究・調査成果としては以下のものがある。西川・間壁1970、伊藤1987、亀田・能美2002、亀田2006c、牛窓町史編纂委員会1997、長船町史編纂委員会1998、邑久町史編纂委員会2006など。
- (2) 小稿では、大まかな目安であるが、杯部の高さの1.2倍以下の高さの脚部を短脚、2倍以上を長脚、その間のを中脚と仮に呼んでおく。今後の検討が必要であるが、ひとまずそのように区分しておく。
- (3) この7世紀の飛鳥・難波宮関連、そして8世紀代の平城宮などの須恵器については小田裕樹さんに多くのことをご教示いただいた。記して謝意を表したい。また、2019年7月13日・14日に奈良文化財研究所で開催された研究会での発表・討論・資料の観察はとても勉強になった（奈良文化財研究所・歴史土器研究会2019）。
- (4) 森川2019a（p.38図2）では、亀田がこれまで述べてきた杯Hの蓋が身となって使用され続けたのではないかと述べている天地逆転した蓋のうち、口径10～12cmのものを杯G、杯Aとして例示している。亀田は備前邑久窯跡群資料に関しては、ひとまず底部の平底のあり方、体部から口縁部の広がりなどを目安に杯H蓋が身になったものと杯G身、杯Aに区別している。備前邑久窯跡群で生産された杯Hの蓋が身になったものが宮都に運ばれ、このように使用された可能性があるのかもしれない。今後も検討していきたい。
- (5) 岡山理科大学生物地球学部学生の石井翔真君のおじいさんがこの土橋窯跡の位置する土地をお持ちで、おじいさんのご自宅に高台付礎があることをご教示いただき、拝見させていただいた。記して謝意を表したい。
- (6) この項の礎に関する各参考文献は亀田・平山2016を参照していただきたい。ただ、この小文が刊行されて後、福田正継氏より岡山市天神河原遺跡などで礎が出ていることをご教示いただいた（高田編2009）。そして蹄脚礎が含まれている。記して福田

氏に謝意を表したい。

- (7) 発掘調査以外の資料に関しては、長船町分は長船町史編纂委員会1998、邑久町分は邑久町史編纂委員会2006、牛窓町分は牛窓町史編纂委員会1997による。以下同様である。
- (8) 上記の2019年の奈良文化財研究所における研究会において、筆者も飛鳥地域の土器を拝見させていただいた。そこで備前産といわれているものがすべて備前邑久窯跡群産のものかどうかはわからなかったが、新田2019図21の西橋遺跡谷1の資料は備前邑久窯跡群の資料としても違和感はなかった。西橋遺跡谷1の資料は前述のように661年、または672年と推測される木簡と共存しており、これらの土器が7世紀中葉から少しあとの時代であるとして、備前邑久窯跡群の須恵器編年を考えても違和感はないと思っている。

参考文献

- 相原嘉之2019「西橋遺跡出土土器」『飛鳥時代の土器編年再考』奈良文化財研究所・歴史土器研究会、20-33
- 池田浩1998a「36 青木1号窯跡」長船町史編纂委員会編『長船町史 史料編（上）』長船町、251-253
- 池田浩1998b「40 奥池中池1・2号窯跡」長船町史編纂委員会編『長船町史 史料編（上）』長船町、260-263
- 池田浩1998c「44 比丘尼岩下窯跡」長船町史編纂委員会編『長船町史 史料編（上）』長船町、272-274
- 池田浩1998d「52 生砂（産土）池窯跡・53 新池窯跡・54 正伝名池窯跡」長船町史編纂委員会編『長船町史 史料編（上）』長船町、336-348
- 池田浩1998e「55 油杉窯跡群」長船町史編纂委員会編『長船町史 史料編（上）』長船町、349-353
- 石井啓・小西通雄2006『伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査報告書Ⅱ』備前市埋蔵文化財調査報告7、備前市教育委員会
- 市川創2020「第10章 難波地域の地割りと土器様相からみた大化改新」大阪市立大学難波宮研究会編『難波宮と大化改新』和泉書院、205-224
- 伊藤晃1974『新林（宮嶋）窯址の調査報告－東備西播有料道路建設に伴う－』邑久町教育委員会
- 伊藤晃1987「第十一章 窯業」近藤義郎編『岡山県の考古学』吉川弘文館、531-588
- 伊藤純1992「風字硯をめぐるいくつかの問題－考古資料と伝世品－」『ヒストリア』135、大阪歴史学会
- 井上弘・武田恭彰・時枝克安・伊藤晴明1988「上竹西の坊遺跡」岡山県古代吉備文化財センター編『山陽自動車道建設に伴う発掘調査3』岡山県教育委員会
- 宇垣匡雅1985「須恵庵寺採集の瓦」福田正継編1985『西谷遺跡』長船町教育委員会
- 牛窓町史編纂委員会編1997『牛窓町史 資料編Ⅱ』牛窓町
- 江見正己1998「34 木鍋山1号窯跡」長船町史編纂委員会編『長船町史 史料編（上）』長船町、237-240
- 大阪府文化財調査研究センター2002『大坂城址Ⅱ』
- 岡田博1983「[9] 土橋窯址出土遺物について（邑久郡牛窓町長浜所在）」『岡山県埋蔵文化財報告』13、岡山県教育委員会、135-

141

岡村勝行ほか1999『細工谷遺跡発掘調査報告Ⅰ』（財）大阪市文化財協会

邑久町史編纂委員会編2006『邑久町史 考古編』瀬戸内市

長船町史編纂委員会編1998『長船町史 史料編（上）』長船町

長船町史編纂委員会編2001『長船町史 通史編』長船町

小田裕樹2016「古代宮都とその周辺の土器様相－「律令的土器様式」の再検討－」『第19回古代官衙・集落研究会報告書 官衙・集落と土器2』奈良文化財研究所

尾野善裕2019a「飛鳥時代宮都土器編年の再編に向けて－飛鳥・藤原地域を中心に－」『飛鳥時代の土器編年再考』奈良文化財研究所・歴史土器研究会, 1-18

尾野善裕2019b「古代宮都と備前の須恵器生産」『寒風古窯跡群と都との関わり』瀬戸内市, 7-8

亀田修一1997a「51 寒風窯跡群」『牛窓町史 資料編Ⅱ』牛窓町, 234-246

亀田修一1997b「56 土橋窯跡」『牛窓町史 資料編Ⅱ』牛窓町, 256-258

亀田修一2002「吉備の瓦塔」『環瀬戸内海の考古学－平井勝氏追悼論文集－』下巻, 古代吉備研究会, 429-454

亀田修一2006a「75 さざらし奥池窯跡」『邑久町史 考古編』瀬戸内市, 729-733

亀田修一2006b「78 新林（宮嶮）窯跡」『邑久町史 考古編』瀬戸内市, 737-745

亀田修一2006c「第6章 邑久古窯跡群 邑久古窯跡群概説」邑久町史編纂委員会編『邑久町史 考古編』瀬戸内市, 697-703

亀田修一2015「備前邑久窯跡群出土文字資料に関する覚書」『半田山地理考古』3, 岡山理科大学半田山地理考古学研究会, 65-79

亀田修一2017「土師器を須恵器窯で焼くことに関する覚書－備前佐山東山窯跡群資料を対象として－」『半田山地理考古』5, 岡山理科大学半田山地理考古学研究会, 27-34

亀田修一2018「備前邑久窯跡群の須恵器甕に関する覚書」『半田山地理考古』6, 岡山理科大学半田山地理考古学研究会, 73-96

亀田修一・池田善文1996「Ⅲ 山陽（山口、岡山、広島）」舟山良一・松本敏三・池田榮史編『須恵器聚成図録 第5巻 西日本編』雄山閣出版, 53-73, 図版97-130

亀田修一・白石純・徳澤啓一編2014『備前邑久窯跡群の研究』岡山理科大学考古学研究室

亀田修一・白石純・徳澤啓一編2015『佐山東山窯跡群第4次発掘調査概報』岡山理科大学考古学研究室

亀田修一・白石純・徳澤啓一編2016『佐山東山窯跡群第5次発掘調査概報』岡山理科大学考古学研究室

亀田修一・白石純・徳澤啓一編2017『佐山東山窯跡群第6次発掘調査概報』岡山理科大学考古学研究室

亀田修一・白石純・徳澤啓一編2018『佐山東山窯跡群第7次発掘調査概報』岡山理科大学考古学研究室

亀田修一・白石純・徳澤啓一編2019『庄田工田窯跡第1次発掘調査概報』岡山理科大学考古学研究室

亀田修一・白石純・徳澤啓一編2020『庄田工田窯跡第2次発掘調査概報』岡山理科大学考古学研究室

亀田修一・能美洋介2002「一 窯は動く」岡山理科大学『岡山学』研究会編『備前焼を科学する』シリーズ『岡山学』1, 吉備人出版, 6-21

亀田修一・平山晃基2016「岡山県内古代陶硯に関する覚書」『半田山地理考古』4, 岡山理科大学半田山地理考古学研究会, 103-124

亀田修一・横山聖2013「かえりを有する輪状つまみ杯蓋小考－岡山県佐山新池1号窯跡出土例を中心に－」『半田山地理考古』1, 岡山理科大学半田山地理考古学研究会, 19-32

葛原克人1975『奥更谷古窯址の調査報告－東備西播有料道路建設に伴う－』邑久町教育委員会

佐藤隆2019「難波地域における7世紀の土器様相」『飛鳥時代の土器編年再考』奈良文化財研究所・歴史土器研究会, 76-115

白石純2001「原始・古代 第3章 古墳の時代－古代国家への道－3 科学が語る須恵器・瓦（鴟尾）の移動」牛窓町史編纂委員会『牛窓町史 通史編』牛窓町, 163-173

白石純2020「5 山陽・四国地方の鴟尾 H 岡山県・香川県出土鴟尾の胎土分析」『第20回シンポジウム 鴟尾・鬼瓦の展開Ⅰ－鴟尾－発表要旨』奈良文化財研究所, 141-144

高田恭一郎編2009『中島遺跡・宮南遺跡・国長遺跡・天神河原遺跡』岡山県教育委員会

長尾早江子・亀田修一2019「須恵器車輪文当て具文様に関する覚書－西日本を中心に－」『半田山地理考古』7, 岡山理科大学半田山地理考古学研究会, 47-96

中野雅美2006a「83 奥更谷窯跡」『邑久町史 考古編』瀬戸内市, 762-766

中野雅美2006b「87 福谷湯通窯跡」『邑久町史 考古編』瀬戸内市, 776

中村浩1981『和泉陶邑窯の研究』柏書房

中村浩編1989『牛頸ハセムシ窯跡群Ⅱ』大野城市教育委員会

中村浩2001『和泉陶邑窯出土須恵器の型式編年』芙蓉書房出版

奈良文化財研究所・歴史土器研究会2019『飛鳥時代の土器編年再考』

西川宏・間壁忠彦1970「備前の古窯」近藤義郎・上田正昭編『古代の日本』角川書店, 293-311

新田宏子2019「播磨・備前の7世紀須恵器編年」『飛鳥時代の土器編年再考』奈良文化財研究所・歴史土器研究会, 116-137

馬場昌一ほか2009『史跡寒風古窯跡群－史跡整備に伴う確認調査－』瀬戸内市埋蔵文化財発掘調査報告1, 瀬戸内市教育委員会

福田正継編1985『西谷遺跡』長船町教育委員会

間壁葎子1986「[「大久」銘の平瓶と二, 三の問題]」『倉敷考古館研究集報』15, 倉敷考古館, 33-48

森川実2019a「飛鳥時代における須恵器食器の法量変化」『飛鳥時代の土器編年再考』奈良文化財研究所・歴史土器研究会, 34-53

森川実2019b「須恵器の白はどう使う？－古代調理具の使用実験から－」『寒風古窯跡群と都との関わり』瀬戸内市, 11-12

山磨康平編1978『寒風古窯址群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告27, 岡山県教育委員会

引用挿図（いずれも一部改変引用）

図2①：江見1998，図2②：池田1998a，図2③，図4①，③～⑤：馬場ほか2009，図2④：池田1998c，図3：伊藤1974，亀田2006b，図4②：岡田1983，亀田1997b，図5・図6①：亀田1997a，図6②：葛原1975，中野2006a，図7：亀田ほか2019・2020，図8・9：亀田ほか2014，図10～12：亀田ほか2014・

2015～2018，図13①：石井・小西2006，図13：亀田ほか2014，図14：池田1998e

連絡先

【亀田修一 〒700-0005 岡山市北区理大町1-1
岡山理科大学生物地球学部考古学研究室】